

## 岐阜県における「赤い鳥」綴方概観

—— 大正期末を中心にして ——

高 橋 弘

### 一

鈴木三重吉が「赤い鳥」を創刊したのは大正七年七月のことである。三重吉はこの動機について、わが子のために美しいお話を読んでもやろうとして本屋を回ったところ、子どもの読み物が俗悪で下劣なのに呆然とし、それではと、童話雑誌を作ることを出版業者に計ったが断られ、憤然として独力で「赤い鳥」をおこした、と書いている。

こうした体験をもとに三重吉は、毎号載せた『「赤い鳥」の標榜語』で、その当時の「世間に流行してゐる子供の読み物の最も多くが、「俗悪」「下劣」「世俗的」「下卑た」ものであり、それが、「子どもの真純」「子どもの純性」を侵害していると断じ、だからこそ、「世間の小さな人たちのために、藝術として眞價ある純麗な童話と童謡を創作する、最初の運動を起したいと思ひまして……………」

と創刊の意図を明らかにしている。（「赤い鳥」創刊に際して配布したプリント）

このプリントの後半部分で、三重吉は「赤い鳥」で扱う綴方について、次のように抱負を述べている。

□巻末の募集作文は、これも私の雑誌の著しい特徴の一つにしたいと思ひます。世間の少年少女雑誌の投書欄の多くは、厭にこましくくれた、虫づの走るやうな人工的な文章ばかりで埋つてゐます。私たちは、こんな文章を見るくらゐ厭なことはありません。私は、少しも虚飾のない、眞の意味で無邪氣な純朴な文章ばかりを載せたいと思ひます。……………どうか文章の長短に拘らず、空想で作つたものでなく、たゞ見た儘、聞いた儘、考へた儘を、素直に書いた文章を、續々お寄せ下さいますやうお願ひ致します。

このような、綴方に対する三重吉の意気込みにもかかわらず、初めのうちは、「……………投書も随分ありますが、どうも私の選定と基準が違つてゐて、取れるのが少ないので、毎号四頁乃至六頁の綴り方を揃へるためには記者が方々の學校を廻つて、先生の手許にある作文中から豫選して來るのです。……………」(大七・一〇)という状態であり、掲載された綴方にしても、このような作品を赤い鳥作文欄に載せることは、応募への意欲をかきたてるための配慮かもしれないが、決して三重吉の本意ではなかったであろうと思わせる作品が多い。この間の事情については、木内高音が『綴方読本』(鈴木三重吉著)のあとがきの中で、

……………「赤い鳥」の綴方の主旨が、選ばれたる學級指導者その他の共感を得て、次第に小さき人々の、近頃流行の言葉を用いるならば、主體性に富んだ純粹な作篇が寄せられてくるまでは、まるで野に遺賢をさがすともいうような苦辛が拂われたのであつた。一例をあげれば、「赤い鳥」創刊當時、私の擔當した仕事だけでも各所の小學校を歴訪して、うず高い作文帳の山を片はしからよませてもらい、三日も四日もかかつてやつと一つか二つの作を見つけて歸るといふ寶さがしみたいな努力だったのである。教師が二重丸や三重丸をつけたものの中にはほとんど取るに足るものがなかつたことはいふまでもない。(昭三・

養徳社版による)

と述べている。従つて、初めのうち三重吉は毎号、綴方の選評の中で主張を繰返し、主旨の徹底を図らねばならなかつた。

すべて大人でも子供でも、みんなかういふ風に、文章は、あつたこと感じたことを、不斷使つてゐるまゝのあたりまへの言葉を使つて、ありのまゝに書くやうにならなければ、少くとも、さういふ文章を一ばんよい文章として褒めるやうにならなければ間違ひです。(創刊号)

私は頭でこしらへて書いた作文はとりませんから、どうか、見たこと聞いたこと、あつたことを、そのまゝ書いた作文をよこしてください。(第二号)

みなさんの綴り方を見て第一にいやなのは、下らない飾りや、こましやくれたたとへなぞが、ごたく使つてあることです。私がいつも選ぶ綴り方を見てごらん下さい。みんな、たゞ、あつたことを、ふだんお話しする<sup>ママ</sup>とほりの、あたりまへのことばでお話したものばかりではありませんか。(第三号)

……………こしらへたことや、りくつや、品のよいきれいなことばかりをよりぬいて書かうとするやうな考へは一さいやめて、どんなことでもかまはず、自分のしたこと、見たことを、なんでもそのまゝ書くやうにして下さい。それもなるだけ人がかいて

ゐないやうなことを書くのがよいのです。(第四号)

書きぶりから考えて、三重吉は最初のうちは、これらの選評を、どちらかという子どもに向かって書いていたように思われる。しかし、教師からの質問や感想の投書が多くなり、また、学級まとめて綴方が送付されてくるなど教師との交流が始まるようになって、三重吉は、自分が願う綴方作品が生まれてくるためには、直接児童の指導に当たる教師に向かって書くことの大切さを感じ始めたようである。創刊から一年余りたった大正八年十月号の通信欄には、次のように書いている。

綴方は対象が対象だけに、学校の科目中でも特に教授上の研究が充分に纏め盡されてゐないやうに思はれます。今の状態では綴方の成績は事實上、偶々正當な定見を備へた教師の個性的感化と、誘導とに信賴する以外に、一般の教授者に取<sup>つ</sup>て何等の目標も與へられてをりません。私に取<sup>つ</sup>ては少くとも、月々集つて来る二千に近い応募綴方が、最よくその欠陥を語つてゐます。子供が任意によこす以外に熱心な先生方から態々纏て送つて下さるのも随分多數ですが、その中には私どもが見ますと種々の意味に於て非常に導き方を誤つてゐると思はれるものが少くないやうです。私は次號から、さういふ點を概括したり、又は子供の作そのものについての斷片的な意見をも公開して、

綴方の實質的改善に向つて多少の寄與を計ると同時に、出来るならば教授上の基本的典據を完成する上の一つの動機を作りた<sup>い</sup>と考へてをります。ついで第一に「赤い鳥」讀者中の實際上の教育家諸氏から私の意見に對する忌憚なき御非難と、次にはさういふ方々の教授上の御發見や色々の御經驗を「赤い鳥」に續々御發表下さることをお願い致します。かうしたわれわれの研究が段々と集成されて來れば、或は最後にはわれわれの手で綴方なり進んでは上の程度の作文そのものゝ取扱について或一つの組織的法則を作り試ることが出来ないとも言へません。……(中略)……かういふことを考へて來ますとわれわれの斷片的研究も、一つの大きな建設に對して非常に意味深い基本の一部分になる譯です。

このようにして三重吉は、以後七回にわたり、「綴方の研究」と題して「綴方の課題について」「形式上の解放と經驗の充實」「所謂綴方教授法の生命」など、綴方教授上の問題とそれに対する考え方を連載していく。

また綴方選評欄も、一々の作品について、具体的な箇所、表現をあげて良き、欠点を解説していく以外に、例えば、

入賞第一の小林さんの「うちのかあさん」は本當に子供の眞實と簡朴との價を誇るべき好箇の傑作です。すべての情景が、

ひし／＼と胸に迫つて一人でにほろりとして來ます。どなたも、たゞこれだけの描寫が、こんなに力強く人を引きつける所以を考へて下さい。こんな作をみると、餘計な工作や技巧の無駄なこと有害なことが切實に分るでせう。かうなれば最早、言ひまはしの上手下手などは何等の問題にもなりません。たゞ眞實と純朴との力です。すべて鳳來小學校から送られる多數の作品はどれを見ても、みんな餘計なたくみや飾り氣の寸分もない、土から生えたまゝのやうな純眞なものばかりです。私は、同校長高橋幸高氏以下、すべての先生方の、怖らく容易ならぬ不斷の努力に對し常に感謝を捧げてをります。どうか、諸校の指導者諸君はどこまでも子供の自然を、畏れ貴んで、彼等の自己を、つまり彼等の考へる儘、ありの儘を、その儘表出さすやうに努めていたゞきたいものです。表現方法についても子供は彼等自身と言ひ方、現はし方を持つてゐます。その自己自身に最容易で且つ自然な表現法によらせればこそ、彼等の眞實が本當の眞實となるのです。大人の技巧を強課するのが一等いけません。たゞいつもいふとほり、年級によつて文字、假名使ひ、事實の錯誤、重複、敍寫の不秩序等について、適當な注意を與へて下さる以外には、決して表現について口を入れないで下さい。それよりも寧もつと根本の問題として、そんな閑で出来るだけ作

品に表はれた事實について、子供たちの生活を正しく深く、大きくするやうに、彼等の實さいの考へと行ひとの上に適當な注意を與へて下さい。綴方は常に子供等の實生活を窺ひ計る、好箇の機會を與へてゐるのです。(大一〇・三)

のように、その作品を借りて、表現の指導についてはもちろん、綴方指導の根底にあるものについて教師に語りかけるような内容が増えてきている。そしてこれらの集大成が、昭和十年の『綴方読本』となるわけである。

三重吉はまた、児童の綴方変容の姿、指導教師との交流の中から、自分の選評に一層の自信と意義を見出し、この欄の一層の充実と指導教師への呼びかけを強化していく。

以後だん／＼にくはしく講話しますが、綴方の指導については、私が毎號實作をかゝげて鑑賞批評をする、この選評が何よりのもの御参考になるのですから御注意下さい。つまりこれによつて、綴方の實質といふものは、どんなものであるべきかが具體的に分り、めい／＼の児童の作をどこまで導き上げて來なければならぬのかの標準もつくわけです。言葉をかへていふと、私の鑑賞を味覺することによつて綴方の批判力がぐん／＼養成されるのです。作品としてどういふところが缺点となるのかといふことが、製作的に、しぜんと飲みこめて來ます。この

修得そのものが、指導の實力となるのは言ふまでもない話です。つぎには児童の綴方を引上げていく手段としても、みんなの製作を、私の鑑賞のとほりに味つて、作の部分と全體との価値を飲みこませること、同時に一面には、必ずすぐれた入選作をよまし、それを私の鑑賞のとほりに嘗め味はせることこの二つによつて、しぜんと、児童の觀察を導き、感覺を鋭くするより外には事實何等の方策もないのです。この意味においても、綴方の成績は一に指導者の、行きとどいた鑑賞力（つまり批判力）によつて上下することになるのです。今私は、綴方の価値といふ言葉を使ひました。その価値とはどういふものか、それはいつか秩序的に講話する際に十分解剖してお話いたします。

ともかく、以上の點に、私の選出作と選評との重大な役立ちがあるのです。たゞし、選評は何分にも限られた紙面でのことです。ですから重要なことのみを上げて、小さいことは省略する場合もあります。ですから、私の言つたゞけが常にその作について言はれるべき全部ではあり得ません。私の言つた例にならつて、残りの一々を、もれなく鑑賞して下さる必要もあるわけですね。（昭六・一）

このような、ひとまとまりの文章になったのは昭和六年であつたにしても、三重吉のこの考え方は、例えば「……どなたも以上のす

べての作について、それぐうまみのあるところを、私の指示に従つて、よく調べ味はつて見て下さい。」（大一二・九）などと、「赤い鳥」創刊以来、毎号毎号、具体的な作品について、部分部分について述べられてきているものである。

従つて、児童を中心に据え、児童の個性、自由、自学、創造を尊重していこうとする大正期の教育風潮の中にあつて、なんとか明治期の形式的、画一的な作文指導から抜け出したいと模索を続ける熱心な教師たち、特に若い教師たちにとって、「赤い鳥」の綴方選評欄、通信欄に載る鈴木三重吉のこれらの言葉は、この上なく力強い励ましとなつたにちがいない。また、鑑賞中心の指導法にまで三重吉は言及しているのだから、綴方の授業実践の具体的な拠りどころにもなる。「赤い鳥」通信欄、読者欄には、全国各地から、

私は「赤い鳥」が単に綴方教育の上だけでもどんなに偉大な貢献をされてゐるかを感謝し続けてゐます。私の學校では、純眞な読物を與へる意味からも各學年に二冊づゝ毎號の貴誌を備へ自由に誦讀させてゐることを、ひそかに誇りとしてゐます。

（岐阜縣稻葉郡那加小綴方研究主任・日比野 昭二・九）

など多数の信奉者の言葉が寄せられてくるのも当然であろう。

大正末期、稻葉郡本莊小にあつて綴方指導に当たつた福富高市は、「岐阜縣教育」（昭七・二）に「赤い鳥の綴方、その他」を載せたが、

その中で「私は小學校教師としての十何年、『赤い鳥』の指導に随従し」という表現をしている。「随従」という言葉がまことにぴったりするような、三重吉の綴方指導への熱い渴仰にも似た思いの全國の教師たちの実践が、「赤い鳥」の綴方の隆盛を支えたということもできるであろう。

「鈴木三重吉が『赤い鳥』を創刊したことは、日本作文史の上において劃期的なことであつたばかりでなく、わが国の初等教育史の上でも特記さるべき事件であつたといえよう。」「赤い鳥の綴方運動は、まさに革命的であつたといつていいであろう。」(川口半平『作文教育変遷史』)と評価され、ここで生まれた綴方に「赤い鳥綴方」という名称が付されているのも首肯できることである。

## 二

### ヲブサヘ運動ノ記

岐阜尋高、尋四 河野英子

十月七日 天氣ヨク晴レテオリマシタカラ、喜ンデ八時學校ヲ出マシタ、長良橋ヲ渡リマストモナク、オブサニツキマシタ。コ、ニハ、大キナロー門ガアツテ、石ダンヲ高クツミ上ゲタ上ニ、カンノン様が、オマツリシテアリマス、ケイダイデ、オワカレシテ、モツテキタ、オベントーヲ、ユルくト、イタゞ

キマシタ、常ヨリモ大ソーオイシューゴザイマシタ、ソレカラウラノ山ヘノボリマシタ、山ノトコロへニ、ナハダリガシテアツテ、「此内ノコケトルベカラズ」トカイテアリマシタ、下ヲミヲロシマス、ミノツタ稻ガクビヲタレタル、ソノ間ヲ小川ガウネツテ流レテオリマス、長良橋モトホクニ見エテ、誠ニヨイケシキデス、コレヲ見ナガラ山ヲオリテ、歸リ道ニツイタ、唱歌ヲ歌ヒナガラ、二時頃歸リマシタ、今日ノ運動ハ、大ソーオモシロクテ心モチガ、ヨクゴザイマシタ。

これは、明治四十二年十一月、岐阜で創刊された「教育新聞」<sup>(1)</sup>の中の「少年文壇」の欄に載った二十余りの綴方の中の一つである。この欄は、「児童文壇」「少年少女綴り方」と名称を変えながら昭和期まで続き、岐阜市及びその周辺都市の児童の綴方を載せているが、これによって、大正期末頃の、岐阜県における児童の綴方がどのようなものであつたか、一般的な状況を窺い知ることができる。

此頃の霞ヶ谷 揖斐郡温知校尋五 國枝鈴枝

おゝ春の國がおとづれた、私は春のゆめの中に包まれながらぼんやりと、霞ヶ谷の方に見とれて居た、あの花の下で先生や友達と飛遊べるのかと思ふとほんとうに楽しい、花の下で遊んで居る時は、もう霞ヶ谷の子になつたやうな心持がする。

遠い所から見ると、早や今から櫻の花が咲いて居るやうで、

うす紅のやうなもえ黄のやうな、なんとも言ひやうのない色が見えるやうです、其の中を目のぼつちりした和らげな羽をばたばたさせながら、枝から枝へと飛廻る小鳥が楽しく遊んでゐる。

春は櫻の峯續き……、と聲を張上げて歌つてゐると、霞ヶ谷にまでひびくかのやうな心持で又も大聲上げて歌つた。

(大一二・四)

朝顔 山縣櫻尾校尋六 松久 昇

暁の東空が白々と白み、鶏が勇ましく明けの時を報ずる頃、やさしく、柔く、然も美しく、咲きそろふのは朝顔である。

朝早く飛び起き外へ出て見れば、濃い緑色の葉の上に、金銀や寶玉かと思はれる美しい朝露がころころ宿り、清々しい朝風に音もなく、朝露はらはら落ちる。其の間からポツと赤青白の三色の花が浮出て居る。其の様子は、實に夢のようで、語では言ひつくされない。

あゝ朝顔は清々しい花である。

僕は朝顔が一ばん好きだ。(大二三・一〇)

教育新聞児童文壇のこの時期の選者山田杏月は、「児童文総評」の中で、応募綴方について次のように述べている。

□概して慾をいふと、少年らしく、少女らしくない、書きぶり

が多い。古い作文書か、無智な老人の考えて居るやうな、涸れはてた生々した血の氣の少い文が多い。どういふものだらう。實際少年少女といふものは、そんな大人びたひねくれたものでない。もつとく澆漓としたのび上るやうな無邪氣がある筈である。

□貴方たちの誰でもが無心になつて、他愛のないことを語つてゐることをきくと、實にいゝところがあると思ふに、綴方として文にすると、どうも大層なへだゝりがある、しづりがある。

これは思ふことを偽らず、飾らずありのまゝに述べやうとする素直さがたりないからだ。

□トルストイといふ文豪がいつた。「雪が砂のやうに光る」といふ文句は有名です、何んと大膽ないひぶりではないか。皆さんなら何といひます、雪といへば銀世界とおきまり文句ばかりが藝ぢやない。さうして物事をよく注意してみることを考へることですね。これは單に文を上達せしめる法のみならず、人間をゑらくする方法です。(大二三・一〇)

教育新聞に載つたこの期の綴方やその「総評」を読むと、木内高音が『綴方読本』のあとがきで記した「赤い鳥」創刊の頃の状況が、岐阜県においても一般的であつたことが分かつてくる。

そうした中で、「赤い鳥」綴方欄に、岐阜県児童の綴方が最初に

掲載されたのは、大正八年、武儀郡中之保小高等科一年・沢田傳治郎の作品である。

赤ん坊（賞）

岐阜縣武儀郡中之條（中）小學校高等一年

澤田傳治郎

鎌一さんの妹で六つ位のたきゑさんと、五年の時さんと、隣の四つになるそのさんとが内の庭で遊んでゐる。この間鎌一さんのお母さんが子を産みなさつたさうだ。それについて話をしかける。僕「生れたかよ」たきゑ「生れたわ」僕「名は何とつけたの」たきゑ「名はまだ来んも」名がどこから来る者と思つてゐるのであらう。僕「名は内で附けさせるのだぞ」たきゑ「ふうん」と笑ふ。僕「男が生れたのか、女か」たきゑ「男」僕「足はどの位の太さ」たきゑ「まだ分らん」僕「どうして」たきゑ「そら着物でつくんであるも」たきゑさんは櫛を手につけてなぶつて居たが、すべり落ちたので、あわてゝ拾つて頭にさした。が、又取つて鼻糞をぼろゝかき落しはじめた。時さんはそれを見て笑つてゐる。僕「手の長さや太さはどの位」たきゑ「手も足もしばつてあるで分らん」僕「そんなら頭はどの位」たきゑ「この位」手でひぢけた小さい頭の形を作る。時さんは手で卵形を作つて「生れた子はこの位」と言ふ。僕も「この位か」と

形を作つて見た。黙つて土をなぶつてゐたそのさんが「おれんとこのきのはほんと泣くぞ」と言ふ。きのさんは生れて七八ヶ月で、いつでも大の字になつたり龜のやうになつて臺所をまわつて歩く子である。高山行の自動車が烈しい音をたてゝ通るかゝつたので、三人とも街道へ走つて行つた。

この綴方に対して、鈴木三重吉は次のように評している。

……澤田君の「赤ん坊」とは、ねらつて書いたことが珍らしいので、すぐに選に入れました。中でも澤田君のは、たきゑさんのお話が、いかにも滑稽でいきゝとしてゐます。私は読みながら、聲を出して笑ひました。……（大八・一一）

この後岐阜県は、二年半余りあとが続かず、次に出てくるのが大正十一年、稲葉郡本荘小の作品である。これらも含めて、創刊から終刊までの「赤い鳥」に掲載された綴方の状況全体を見たのが、（表一）である。

まず掲載数で見ると、「赤い鳥」に掲載された綴方作品総数千百二点のうち、岐阜県の作品は六十七点、総数比約六パーセントである。

これを、「赤い鳥」が創刊された大正七年七月から、財政面での行き詰まりで休刊になった昭和四年三月までを「前期」、再刊された昭和六年一月から、三重吉の死去によって終わった昭和十一年八



年	掲載総数	岐阜県綴方	同 選外	掲載の岐阜県 自由詩作品
大正	7	81	・	・
	8	89	1	・
	9	102	・	・
	10	90	・	・
	11	74	1	12
	12	58	18	63
	13	68	16	78
	14	66	13	46
	15	72	3	11
昭和	2	69	2	8
	3	56	1	5
	4	12	・	・

	6	58	5	22	5
	7	48	2	10	1
	8	40	1	7	4
	9	43	2	13	4
	10	44	2	4	2
	11	32	•	2	•
前 期		837	55	229	148
後 期		265	12	58	16
合 計		1102	67	287	164

に見たものが、次頁「表2」である。

これを見ると、自由詩作品も含めて、群を抜いて多いのが当時の可児郡今渡小学校（現・可児市今渡南小）と稲葉郡本荘小学校（現・岐阜市本荘小）であることがわかる。

また、一校ではないが、自由詩の益田郡萩原小学校も含めて、大野郡高山女子小学校（現・高山市南小）、同大八小学校（現・

月までを「後期」と分けてみると、岐阜県においては、前期五十五点（前期総数比約六・六パーセント）、後期十二点（後期総数比四・

五パーセント）と、前期の掲載数、比の方がはるかに多い。また、前期の中でも、綴方選外佳作数や掲載自由詩数の状況も併せ考えてみると、大正十二、十三、十四の三年間の掲載数が、極めて顕著な増加を示していることが分かる。

次に、「赤い鳥」に掲載された岐阜県児童の綴方を、その学校別

高山市東小《統合》、同福寄小学校（現・大野郡清見小《統合》）といった飛騨地区の学校のかたまりも目につく。

大正十二年に刊行された『岐阜県教育五十年史』（岐阜県教育会編纂・発行）によると、当時の小学校数は県下四百七十五校（分教場八十を除く）であるから、「赤い鳥」に校名が出てきた二十七校の全体比は六パーセント弱である。

《表1》の中で掲載綴方作品が数的にピークを示した大正十二、

校 名	掲載綴方数	掲載自由詩数
今 渡 小 (可児)	21	46
本 荘 小 (岐阜)	15	48
高 山 女 子 小 (高山)	6	1
北 長 森 小 (岐阜)	4	2
大 八 小 (高山)	3	・
中 小 (可児)	3	・
福 寄 小 (大野)	2	・
和 良 小 (郡上)	2	・
金 原 小 (本巣)	2	・
中 之 保 小 (武儀)	1	・
長 島 小 (恵那)	1	・
方 県 小 (岐阜)	1	1
錦 津 小 (可児)	1	5
久 々 利 小 (可児)	1	7
島 小 (岐阜)	1	7
中 小 (大垣)	1	・
本 郷 小 (岐阜)	1	・
長 良 小 (岐阜)	・	8
萩 原 小 (益田)	・	18
関 小 (関)	・	4
古 井 小 (美濃)	・	3
女 子 附 属 小 (岐阜)	・	1
墨 俣 小 (安八)	・	1
下 伊 自 良 下 (山県)	・	1
駄 知 小 (土岐)	・	1
明 智 小 (恵那)	・	2
東 武 芸 小 (武儀)	・	1
そ の 他 (卒業生)	1	7
合 計	67	164

あるという状況であった。  
この期間に綴方が掲載された学校は、本荘小、今渡小、福寄小、大八小、高山女子小の五校である。これらの学校の綴方が、「赤い鳥」の全期間を通して掲載された数《表2》と対比しながら見ると、どの学校も、その全部又は殆どが、この期間に集中していることが分かる。

十三、十四年前半に限って、「赤い鳥」発行月別の掲載数とその学校の状況を示したのが次頁《表3》である。

この二年半で見れば、掲載された岐阜県の綴方は四十七点、同一期間の「赤い鳥」掲載綴方総数比二九パーセント、実に三分の一近くを占めているわけである。それも、関東大震災の被害による休刊と二、三の月を除けば、毎月、綴方欄には岐阜県のどこかの学校の児童の作品が載っており、しかも、月によっては、掲載されている綴方の半数以上、あるいは半数近くということが、十指に余るほど

### 三

大正期末、岐阜県児童の綴方作品が数多く「赤い鳥」に掲載され、光彩を放ったとは言っても、それらの作品を生み出した学校数にしてみれば僅か七校に過ぎない。しかし、「赤い鳥」に刺激を受けたと思われる実践は、綴方、童謡、作曲など、県下のあちこちで試みられていた。

「赤い鳥」の主張が、当時どんなふうに関心を受けた教師に受け入れられ、教室での実践に移されていったか、二三の例について見て

《表3》

「赤い鳥」掲載の岐阜県綴方作品数と学校（大正12～14前）

年	月	掲載数	岐阜県作品	備 考		
大正12	1	5	1	本荘1		
	2	6	1	本荘1		
	3	4	2	本荘2		
	4	6	1	本荘1		
	5	7	4	本荘2	福寄1	今渡1
	6	6	3	本荘1	福寄1	本荘2 岐阜1
	7	6	2			今渡1 岐阜1
	8	6	・			
	9	7	3	本荘1		今渡2
	10	(休刊)				
	11	5	1			今渡1
	12	(休刊)				
大正13	1	6	3	本荘2		今渡1
	2	5	3		大八1	今渡1 長島1
	3	6	2	本荘1		今渡1
	4	5	1			今渡1
	5	3	1			今渡1
	6	5	1			今渡1
	7	8	1	本荘1		
	8	6	1			今渡1
	9	7	2		大八1	今渡1
	10	7	1			今渡1
	11	4	・			
	12	6	・			
大正14	1	6	2			今渡2
	2	6	4	方県1		今渡1 高山女子2
	3	6	2			今渡1 高山女子1
	4	6	2		大八1	今渡1
	5	6	1			今渡1
	6	5	2			今渡1 高山女子1
合 計		161	47			

みよう。



大正十年九月号「赤い鳥」の綴方選評で、三重吉は、綴方における方言の使用について、それまで作品評で折々に触れたことをまとめて次のように述べている。

……少くとも對話には方言をそのまゝ寫してゐるので、すべてがあんなに生き々と躍動してゐるのです。もしあの對話を、

標準語に直してかけと言つたならば、三人とも、標準語が自由に使ひこなせないといふ點から、情景をあれだけに生かすことが出来ないのはいふまでもなく、なほそれ以外に、あれが方言であればこそ、地方的事實の特殊の空氣がまざくと出て來てゐるのです。

私は方言の使用については、これまでも度度言つておきましたとほり、もとくみんなの綴方がのびくしないのは、ほか

にも、いろくのわけもありませうが、第一、標準語でものをかゝさうと強いることも非常な障害になつてゐるといふ點に、すべての人がもつと早く注意を向けなければならない筈でした。子供たちが自分等の日常使つてゐるより外の言葉で、ものをかるといふことは、丁度われゝが外國語を考へゝ、話すのと同じやうに、言はうとすることを、一々翻譯しつかいて行くわけで、それが少くとも年少の子供には、どんなに多大の桎梏

であるか分りません。對話を寫實的に生かすといふ手段としてばかりでなく、それ以外の地の文でもかまはず、どんく方言でかゝるのが一等いゝのです。さうすれば、言はうとすることがすぐ直接に表はされて行くわけです。年級が上れば、だんくに標準語も、より自由におぼえて來ますし、又、そのときになつてから、特に標準語へ導くやうに扶掖してもおそくはないので、便宜上、しばらくは何も干渉しないで、無條件に、すべて方言でかゝることを、みんなの方が必ず試みて下さることを希望します。

方言を、悪い言葉として禁止する標準語政策のもとで、国語教育が進められていた当時にあつて、三重吉のこの主張は、赤い鳥綴方に熱中する若く気鋭の教師たち、特に方言が日常化している地域の学校の教師たちには、魅力的であり、十分納得のいくものであったに違いない。そして、実践への意欲を一層かきたてられたことであろう。

これが教室での綴方指導に反映された頃のことを、大正十年から八年間（尋一から高二まで）、高山女子小に学んだ早船ちよ（旧姓住田ちよ）<sup>③</sup>は、その著『教育 青いノート』の中で次のように書いている。教えられる子どもの側からの、その時の戸惑いと解放の喜びとがよく分かる内容である。

小学校三年生のときの綴方の時間に、藤井先生が「文中の会話には、とくべつ、えいことばを使おうと思うな。ふだん使っている方言を、そのままにかけばいい」と、いわれた。それには、クラスじゅうの子どもたちはびっくりしてしまった。

「おうーりよりよ。こんなおぞい言葉つかってもえいもんじゃるか」

「どんびき（蛙）、だちかん（だめ）、てきない（苦しい）、御身（あなた）なんて、禁止語にされとるになあ」

わたしたちは、いわば魔法の呪文がかけられていた緊縛感が急に解かれた、目新しい解放感に、大笑いしあった。



岸 武雄<sup>④</sup>は、揖斐郡横山小で自分が受けた綴方教育を回想し、次のように述べている。

……小学校三年生までは、けい紙に筆で文章を書かされていた（大正十年の話である）。先生が掛図を黒板にかけ、その絵についてまずいろいろ説明する。今でも記憶に残っているのは、なんでも田園の春景色のような掛図について、麦が青々しているとか、雲雀が鳴いているとか、春風がそよそよ吹いているとか説明して、「さあ、今のことを『春』という題で書け」といったやり方であった。山の中の学校ではあるし、課題主義、観念

的・形式的な、いわば明治時代の作文教育であった。

ところが、三年生の半ばごろから先生のやり方が全然変わった。鉛筆で、しかも自分のやったことを書けといわれた。これにはめんくらって、はじめは「初夢」とか「秋景色」とか相変わらず形式的なものを書いていたが、そのうちに「はずかしかったこと」などと題してたらいのたがを直しに村中をたらいをかっついでまわり、友だちにひやかされたことなどを書くようになった。……（中略）……四年生になると、童謡を作られ、おまけに作曲をさせられた。作曲といっても楽譜をかく力はないので、口ででたらめに曲をつくってオルガンの前で歌うと、それを先生が採譜するというやり方である。わたしの先生は、はじめ代用教員であったが、しばらくして音楽の専科教員の免状をとられた人で、音楽はなかなか得意であった。そして、俳句をつくり小説を読む文学青年でもあった。

ツルツルツルとすべるそり

雪煙立て、まっしぐら

水くみに行くおばさんが

「あぶない、あぶない」と呼ばってる

形式的な音律をそろえているところは、童謡句調であるが、内容はかなり子どもらしい生活味が出ている。先生にほめられ、

よほど嬉しかったとみえて、わたしは今完全に歌と曲を記憶している。（『日本新教育史5』 小原国芳・編）

これも、新しい教育の内容と方法が、子どもの意欲をかきたてるものであったことを物語る内容である。そしてここに書かれた、童詩に曲を付ける指導は、やはり「赤い鳥」とのかかわりが推測されるものである。

「赤い鳥」大正八年五月号冒頭に、西条八十の童謡「かなりや」に成田為三が曲を付けたものが載り、最後の「緊急社告」欄に、

○童謡の曲譜募集 選者は「赤い鳥」の賛同作曲家、成田為三、近衛秀麿兩氏。作譜する童謡は「赤い鳥」に出た諸名家の作と推奨の童謡とに限ります。本譜又は略符を御送附のこと。…

○作曲上の注意 一、飽くまで日本的の階調であるべきこと。

二、平明 三、選ばれた謠の言葉の律動が、曲の上でも同じやうに、謠はれる調律の基礎となつてゐること

が出た。翌月号には早速、北原白秋「あわて床屋」に曲を付けたのが入選曲譜として掲載され、七月号からは、成田為三による「募集作曲選評」が掲載されるようになった。

岸を教えた先生のように、音楽が得意でしかも文学青年とあっては、なおさらこの影響が考えられそうである。



「赤い鳥」創刊の大正七年に岐阜師範学校を卒業し、揖斐郡徳山小へ赴任した川口半平は、次の任地、同郡大和小在任中に「童謡について」（「岐阜縣教育」大一一・一一）、「童謡教育」（「岐阜縣教育」大一二・一〇）、「童謡教育私見」（「小學校」臨時増刊号大一一・五）と、次々に童謡教育についての考えと実践を発表したが、ここにも「赤い鳥」の影響が考えられる。「童謡について」の中で、川口は言う。

今の學校は兒童の純な子供らしい情感を養ふ上に果してどれだけのものを與へて居るであらうか。藝術的感激を中心としなければならぬ學校の唱歌までが、如何に主知的功利的であるかは、小學唱歌を見ればわかることである。作者が純な子供の思想感情に没入して歌つてあるものは數へる程しかないではないか。ほんとうの詩を與へられず又それを鑑賞することを教へられない、小さなたましいは如何に不幸なことであらう。

私はさう言ふ意味で綴方に於いて童謡を指導してゆきたいと思ふ。子供に詩や歌は無理だと言ふ人があるかも知れないが、それは眞に子供の心を知らぬ人の言ふことだ。子供の心は常に波うつて居る、うぶな彼等の眞の生活をそのまゝリズム的に表現した童謡には、到底大人の眞似の出来ないものがある。

又た綴方教科の本質から言つても、綴方は兒童自身の生活の

表現であり、自分の心を文字によつて表したものであるから、作品は必しも普通文に限らるべきではない。深き感興を直に歌として表現させる爲から言つても、また兒童の生活を純雅の境地に導くためから言つても、私は童謡の指導は最も自然であつて且適當なものではなからうかと思ふ。

この論に先立つ大正八年に、「赤い鳥」は、作曲の場合と同じように緊急社告で「今度から皆さんからも、綴方、少年少女欄の投書のほかに童話と童謡を募ります。」と呼びかけた。そしてその選を行つた北原白秋は、子どもの作る童謡のすばらしさを認め、感じ入り、選評の中で例えば、

本當の童謡はどうしても子供たちのものです。事實に於てそれがだん／＼證明されて來ました。殊に今回の子供たちの作品は大人たちのよりどれだけすぐれてゐるかわかりません。子供は純眞です、子供の感覺は直接です。（大九・五）

のように度々書いた。川口が、三重吉や白秋の選評から実践への示唆を受けたことは十分想像できることである。

「赤い鳥」の選に入るほどの作品が生まれなかったにしろ、ここに挙げた三つの事例のような「赤い鳥」による実践が、各地にあつたであろうことは推測される。しかし、旧態依然とした綴方指導が大勢を占めたと予測される県下の状況から見れば、新しい実践はま

だまだその数も少なく、また、相互に連絡・連携もない微小な点としての存在であったように考えられる。

川口は、前記の論文の発表と前後して、大正十年の秋に童謡の指導を主とした綴方の公開授業を部落会で行っているが、その時の授業と、参加した教員による授業批評会の様子を、その著『花ぐるみ』の中で、次のように書いている。

童謡はそのころ唱歌としては、これまでの小学唱歌を制して、盛んに歌われていた。……しかし児童に作らせるということとは、まだ新しい試みであった。

授業は、児童にそれぞれ自分の作品を読ませて、相互に批評し合うという単純な形で行なわれた。別に作品を選ぶようなこともせず、児童がうちで作って来た新しい作品を、そのまま取り扱った。……批評会に移った。

しばらくは当惑の表情が流れて、発言する者がなく、会場が白けてきた。困った司会者が席順に指名すると、「どうもよくわからない」という意味のことが多かった。その中に「こうしたことを、綴方へ取りこむことが、妥当であるかどうか」という疑問が出た。「これは児童の遊びにすぎないのではないか」という意見も出た。……講師として招いた付属の指導も、童謡についてはよくわかっていないらしく、「とにかく新しい試

みとして、示唆されるところの多い授業であった」という意味の講評をしたに過ぎなかった。

川口は、この時のことを別の所で「当時の教育界は、かけ声のさかんだったわりに、実体がよく理解されず、大勢は容易に旧態を脱しきれないものがあった」（『岐阜県郷土資料研究協議会会報』）と述べているが、それだけに、「赤い鳥」の革新的な綴方実践を行うことには、周囲の抵抗があり、多大の困難を伴ったはずである。そういう状況にあったにもかかわらず、大正期末、ともかく「赤い鳥」誌上で全国的に「岐阜県の綴方」を印象づけた学校の中で、本荘小、今渡小、高山女子小の場合を取り上げ、そこではどのような綴方指導が行われたのか、それぞれについて見てみたい。

#### 四

大正八年、武儀・中之保小児童の綴方の初出以来途絶えていた岐阜県児童の綴方が、三年ぶりに「赤い鳥」（大一一・八）に載った。本荘小児童の作品である。以後続いて綴方選外佳作欄や入選自由詩に本荘小児童の名前が見え、大正十二年に入ると、一月号、二月号、三月号（二編）、四月号、五月号（二編）、六月号と連続して、いずれも本荘小・尋常六年、続いて高等科一年の児童の綴方が載る。同じように本荘小の尋六、高一児童の推奨、入選の自由詩が、二、

三編ずつ、これも毎号掲載される。大正十三年の「繪話」欄は、本莊小兒童の独壇場の感さえあった。後年、木村文助が「本莊校が當時破竹の勢で進出してゐた」（『綴方生活』昭和六・八）と書いたように、この時期、岐阜県の本莊小は、全国的にも注目される場所となった。

ごむかん（賞）

岐阜縣稻葉郡本莊小學校尋六年

吉村 太郎

晝ごぜんをたべにいつて學校へ來てみると、僕の友だちはだれもゐない。教室へいつてみたがやはり一人もゐない。又外へ出てくると、南の方から貞次郎君がひよろ／＼來たので、うれしがつて「やい貞さ、皆はごむかんを持つて、うちにいつたげなで、おれらもこれからよし原へいこまいか」と言ひながら裏門を出た。おばあさんの裏で石をひろつて、ふところへねじこんでよし原へはしつた。よし原へ來てみると逸治君や秋彦君等が、ごむかんを持つて、ほ／＼白に目をつけてゐた。みんなと一しよになつて三つ又の方へ田んぼをむちや／＼走つた。右側に稻を刈つてゐたお百姓が「おい／＼そんな所を通つてはいかんだないか、出よく」といはつせたので、あわてゝあぜ道を走つたら、雪どけがした後だつたのですべてころんだ。

がまんして道まで出たが、着物や靴下がべた／＼になつてゐた。向うを見ると、すゞめが桑の木の子にいつぱいとまつてゐる。貞さは「これは、はさみうちにしないかんわい。そんでおれと太郎君とは田んぼを行くで、逸治君や秋彦君はあの道を行けや」と命令した。逸治君等は走つて向うへ行つた。それから「一二の三でうてよ」といふと、貞さが「一二の三」といふが早いか、ごむかんをはなしたが、桑の枝にあたつたゞけで、すゞめはぱつと立ち上つてしまつた。秋彦君は大きな目でくやしさにすゞめをながめてゐた。すこし行くと、又すゞめやほ／＼白が五六羽ゐるので、僕がだまつてうつたら、逸治君が、だるまのやうなくり／＼目をして怒つた。三つ又を通つて向うの桑畑へいつて見ると、又々たくさん鳴いてゐるので、僕と貞次郎君とがうつた。やつぱりあたらなんだ。こんどはそばに大根畠があつたので、ごむかんでうつて、大根の折りやいをやつたが、穴があくばかりで一本も折れんので、怒つて大根をひきぬいて桑の木へぶつつけた。そいつの青いうまい所だけをわけてくつた。それから「まあ手工一時間ぐらゐすんだ／＼らうで學校へ歸ろまいか」と言つて、もとのよし原までくると、大きなつぐめが、やなぎの木にとまつてゐた。むねをどん／＼させて皆は一同にうつたが、だれもあたらなんだ。それで、つぐめは立ち上つたが、



又僕の前の木へとまつたので、今度は僕一人でねらひをさだめてうつと、ばたくとしておちた。皆は「やおちたぞ」と大よるこびでもさくの中へ飛びこんで、つかまさうしたら又ばたくとたち上つてしまった。皆は顔色をかへて「今おちたに、なんでたつてしまったぢやらうや」といった。「足だつたでぢやわ」といふと、貞次郎君が「さうぢや、足をぶら／＼にしてたつていったわい」と惜しさうにいった。ところへ高等科の者が五時間をすまして來たので、あいつらあに見つかり、いつでも後がやかましいから、寺の裏からかくれて學校へかへつた。亮太郎君等が「てまいらあ二時間も遊んでしまやがつたなあ。先生が怒つてござるぞ」といったので、びく／＼して教室へ入つた。今日はこんろの寫生だと見えて、まだ残つて仕上げてる者がある。加藤君、杉本君、松波君が得意になつてやつてゐる。そして「てまいらあ、どこへ行つて來た。先生が頭はるといつてござるぞ」といった。正直者の好君が眞黒な畫を仕上げたので笑つてやつた。幸先生は小便に行かつせたるすだから、加藤君の畫を見てゐると、がらつと戸を開けて大きな聲で「太郎等二時間もどこへ行つて來た、馬鹿ッ」とどならしたのですくみこんだ。「こら、この勢ひでは、どうせ、げんこつを喰ふぞ」と思つたが、加藤君等の畫が出来上つたので、その

方がうれしかったと見えて「みろ、加藤君等はこの通りだに。やあ杉本も仕上げたなあ。このかげが一寸かたいぞ」といつて腰かけて直しなさる。「うまいなあ／＼」とほめてやつたら、先生はにこ／＼しだして、とう／＼僕等をしかることを、忘れてしまひなかつた。

この綴方について、三重吉は次のように選評している。

入賞の吉村君の「ごむかん」は、實に愉快な作品です。ごむかんといふのは、木の又へゴムをく／＼りつけて、小さな石をはぢき飛ばす、東京でパチンコと言つてゐる、あれだらうと想像します。學課の時間をぬけ出して、勝手に遊び廻ることだけは甚よくない話であり、それに、作中に出てゐる或にはひから推して、吉村君の級の人はしじゆうそんなことをしているらしい點も感心出来ませんが、假りにそれ等を別問題として事實そのものに觸れますと、いかにも活潑なユーモア（滑稽感）の動いた愉快な作です。みんなが元氣よくびち／＼と飛び廻る、一々の躍動や、大根が桑の木にぶつけられてこはれ飛んだりするすべての風景やそれ／＼の場合の気分や表情までが、活動寫眞をでも見るやうに、あり／＼と目に見えます。引きしまつたしつかりした描寫です。このくらゐ長いものになると、とかくだら／＼して退屈なものになりますが、この作では、ひとりで

にぐんぐ人を引きずつて、終りまで微笑みながら読み通させてしまひます。教室へかへつてからの気持なども非常に滑稽です。先生がいつも一生けんめいに力を入れて指導されてゐる教室内の空気も愉快です。近來での傑作として推奨します。

(大正一二・三)

この作品の最後の部分に出てくる先生が、本荘小にあって「赤い鳥」綴方を熱心に指導した福富高市である。

鈴木三重吉も、「赤い鳥」の綴方選評の中で本荘小、福富、に注目し、次のように書いている。

六年生の作では、本荘小學校のが四つも豫選に這入りました。……すべて、本荘校から送られる作は、みんな、自由にのびくとかけてゐる純ないゝ作ばかりです。但し、いつも六年生のばかりが来るのを見ますと、同校のすべての級の綴方がみんな、この割合に發達してゐるのではないらしく、たゞ六年の受持の福富高市氏の努力で、その級だけが、一人づばぬけて成績がいゝのかと思はれます。それだと年級が移つて又先生が變れば、折角の立派な芽が、ぱつたりとまつたりすることもあるので甚残念です。(大一二・五)

そして福富が本荘小を去ると、そのことをまた選評で取り上げ、岐阜縣の本荘小學校からはその後も續々應募が來ますが、肝

心な或一人の先生の受持級が變つたので、また當分は先のやうな立派なものが出来ないやうです。十分の御努力を祈つてゐます。(大一二・八)

と、良い作品が「赤い鳥」へ送られて來なくなつたことを惜しんでいる。

福富は本荘小から転任した稲葉郡方県小で綴方一、自由詩一。次の可兒郡錦津小で綴方一、自由詩四。その次の同郡久々利小で綴方一、自由詩五。また次の稲葉郡島小で綴方一、自由詩七を「赤い鳥」に載せている。

転任した前記の學校の在任期間が、それぞれ一年程度であつたことを考えると、福富が、新しい學級で、短期間に、精力的な綴方指導を行つたことが推測される。これはまた、福富の「赤い鳥」綴方へのひたむき、一途な打ち込みようと同時に、卓越した指導力を物語るものであらう。三重吉は、このことを、再び「赤い鳥」(大一二・五)の綴方選評で取り上げている。

……岐阜縣の錦津校とは、今度がはじめてです。これは、私にとつて非常に愉快です。ことに錦津校のごときは、受持の先生が閉されてゐた低い生徒をだんぐと引き伸ばしてとうくその中から、こんなに立派な入選する人を出されたのですから、やつと一つむくいられた氣がするでせう。その向上の過程を、

見つけて来た私も、その意味でとくに愉快なわけです。

福富は、単に「赤い鳥」へ受け持ち児童の綴方、自由詩などの作品を送るだけでなく、三重吉と私信もよく取り交わしている。恐らく、その中で、転任のいきさつ、新しい赴任校での指導状況などについても報告していたのであろう。それが、「向上の過程を見つめて来た私」というような表現になったと考えられる。

なお、この後も、三重吉は福富の度重なる転任を気にかけていたようで、『帽子をかくさせるな』（福富 易編）に収められた三重吉からの書簡によると、「学校をお交わりになった御事情には、御同情申上げます。何事も御忍耐の上、専念、児童のためにお働き下さい。」（久々利へ）、「今度は御周囲との調和もよいさうで安んじました。」（島へ）などと書かれている。

その福富高市が、「岐阜縣教育」に『赤い鳥』の綴方、その他」と題する一文を載せたのは、昭和七年二月のことであった。

大正七年に岐阜師範学校を卒業して稲葉郡・本荘小に六年間勤め大正十三年から稲葉郡・方県小（一年）、可児郡・錦津小（一年）、同・久々利小（一年半余）、稲葉郡・島小（二年余）と転任を重ね、同・長良小在任三年になろうとしていた時である。

大正七年、鈴木三重吉先生が児童雑誌「赤い鳥」を創刊せられ、藝術教育の立場から童話、童謡、童謡作曲、自由畫、郷土

畫（生活畫）、自由詩を創始せられると同時に、綴方科の根本的改革を提唱せられましたことに依つて、これまで迷ひに迷つて目的さへはつきりせず、教科の一分科としての價值さへ疑はれ厄介視されてゐた綴方科といふものが、俄に旗標を鮮明にして研究討議せられ、遂に生活指導論に迄押し進められ、誰も彼も生活即ち綴方と叫び、修身科と不可分の重要教科なりと力説するやうになりました。鈴木先生が私財を投じて一意児童教育への寄與を念願せられての功績は、實に我ら實際教育家の感謝措く能はざるものがあります。

◇

「赤い鳥」は議論をする雑誌ではない故、綴方教育に對するまとまつた理論を聞くことは出来ませんけれ共、鈴木先生の綴方觀なるものは、次項の引用文に依つて大體知ることが出来ると思ひます。東京高等師範學校附屬小學校の綴方教授細目にいふ所の目的觀、「綴方は自己の生活を文にあらはし、自己を成長せしめることを目的とする。」の如きは、全然「赤い鳥」の主張を肯定し合流したものと思はれるのであります。

◇

「私の意味づけた綴方なるものは、從來の教育家達の考へてゐるやうな、單なる實用的教科でもなく、又古來の定形的な、趣

味からの文章の稽古といふ如き生ぬるい技巧の修得でもなく、徹底した、児童の純藝術的創作としての価値を誇るもので、つまりは、児童のはつらつとした純真な感覚、妥協を知らざる生地そのままの批判、本當にものに驚き怖れ喜び怒り、愛し悲しむ純感情を保育するための教科である。約言すれば、人格の根本を形づくる正しい理知と、人間味のうるほひとを保護開發するための教育そのものである。…以下引用文略…」（鈴木三重吉）



私は小學校教師としての十何年、「赤い鳥」の指導に随従し、綴方教育——延いては教育全般——に亘つて「赤い鳥」の大きい影響を受けてゐたために、時には自然放任主義の教員の如くに誤解を受けて、苦しい思ひをした事もありますが、今では、最初に私と共に「赤い鳥」誌上に於て、綴方に自由詩に自由畫に、進んでは繪話（生活畫）の發表に縦横の活躍をした當時の子供達が、もはや二十四五歳以上に成人し、静かに批判を加へて私の「赤い鳥」主義を感謝し支持してくれますことに依つて、漸く安心し自信を固め且つは此の上もない喜を感じてゐるのであります。……………（以下 略）

福富高市が、『赤い鳥』の指導に随従し、綴方教育、延いては教育全般に亘つて『赤い鳥』の大きい影響を受け、「時には……………誤解

を受け、苦しい思ひをした事も」あつたが、今、「私の『赤い鳥』主義」とまで自信をもって言い切れることに、深い感慨を覚え、安心立命とも言うべき境地に立つて書いていることが窺われる一文である。

それは、一つには、その時の勤務校である長良小が、当時、職業教育実践の中心校であり、「以前から高等科児童に職業教育の立場から種々の職業調査、郷土調査をやらせ」ていたが、「尋常科に於いても児童が獨力で又協同で各種の調査研究をし、これを綴方に記入することをやつて」おり、それが「愉快で」ならないという、綴方指導も含めての日々の教育実践への充実感、また、「赤い鳥」の復刊、「赤い鳥」会岐阜支部設立に当たつて、「赤い鳥」推薦者に自校の石黒禎一校長を得ることができ（「赤い鳥」復刊第一号、昭六・一）、校内における安定感、これまでの「赤い鳥」綴方実践が認められたという満足感があるからかもしれない。

また、念願であつた「赤い鳥」復刊へ向けて、鈴木三重吉を昭和五年、岐阜へ招いて講演会を開き、多数の会員を獲得して「『赤い鳥』会岐阜支部」の設立に成功したこと、そして「赤い鳥」復刊も成つたということがあつたからかもしれない。

更に、昭和六年末、「赤い鳥」綴方に賛同するなかまで「岐阜綴方教育研究会」をつくり、「教育新聞」の「少年少女綴り方」欄を

足場に、県下児童の綴方の選を始めるようになった、ということも考えられるであろう。

このような、福富を取り巻く状況が、「苦しい思ひをした」時期から数年を経て好転し、順調に事が進んでいる、そのことも福富に「岐阜縣教育」に筆を執らせた根底にあったと考えられる。

しかし何よりも、福富が生涯にわたって教育の中で一貫させた

「私の『赤い鳥』主義」。そのもとになった「赤い鳥」との出会い。「赤い鳥」による綴方、自由詩などを中心とした教育実践への没入。

—— これらを語る時、福富にとって、「最初に私と共に『赤い鳥』誌上に於て、綴方に自由詩に……縦横の活躍をした」本荘小在任当時の児童たちは極めて大きな意味を持っていた。その児童たちが成人した今、「私の『赤い鳥』主義を感謝し支持してくれ」たことは、福富にとって最大、無上の喜びであり、「赤い鳥」綴方への自信につながるものであったに違いない。「岐阜縣教育」に寄せた一文は、福富の確信を物語る内容と考えられる。

では福富は、その本荘小において、どのように綴方指導へ取り組んだのであろうか。『帽子をかくさせるな』に収められた福富の遺稿集の中の言葉から窺ってみよう。

◇私の綴方教育は、頭初からこの赤い鳥の鈴木氏に依って指導啓発されたものでありますが、彼のやかましかった随意選題、

課題等、指導法の末節にとらはれた論争などには殆んど無関心で一路童心の純情を熱愛することからはじめられ、その成長を希求したものに外ならないのであります。

◇……生活という事実があつての文章です。……要は生活です。童心の啓培、教育そのものが綴方指導なのではありませんまいか。

◇子供に歌謡体の童謡を学ばせることは考へものです。……言葉の調子から入った童謡は、とすると詩心を忘れさせます。

心のリズムを置き忘れ勝ちになります。……七五調の音数を数へて心の律動を失わせてはなりません。子供たちの一息一息をそのまゝ自由に、地べたから湧き出たきゃべつの葉が風に動くように自分のリズムを書きあらはすようしむけねばなりません。自由詩の理解を希求してやまない所以であります。

◇文章練習、表現法練習としての綴方の前に、ほんとうの生活を発見する綴方、よい生活を創造する綴方、所謂真理に目ざめるための綴方が来ねばなりません。

断片的ではあるが、これらの言葉からは、福富が一途に子どもと子どもの生活のすべてを容認し、伸び伸びと自由に生活させる中から、子どもの純性、能力を一層高め、よりよい生活を自ら創造して行くように取り計らう、そういう教育の上に綴方の指導もあるのだ、という考え方をしていることが読み取れる。

では福富の具体的な綴方の授業はどのようになされたか、本荘小時代ではないが、可児郡から、稲葉郡・烏小へ戻った昭和三年二月のもので見てみよう。

#### ○第七時間目の展開

一、題材 一つの事件を（子供の生活途上の）精密に叙写した自由作の鑑賞批評と黙想内思。

#### 一、目的

イ 生活の真剣から生れる表現が真実を内観させ私の理念する綴方といふものの姿を少しづつでも見せたいと考えてゐます。

やゝもすると、場当りのな、揚足をとるやうな浅薄な生活態度を、機智、理智と思ひ違ひをしてゐる子供に、この綴方表現を通じて内省させ度いのです。

ロ 学級学習としての鑑賞批評の態度やその方法を指導します。

ハ 本授業中の鑑賞批評は断片的なものでも満足し、家庭作業として課題し、本時を記録作文させ様と意図します。

#### 一、方法

イ 先ず私が、私の机からお尻を上げるまでは、黙想してゐる約束になつてゐます。しかし、これが仲々できません。

（出来ぬ所が子供なのですから。）だけれども出来ぬ事を強いるのが私の考え方です。

つまり、子供と私とが一つ心にとけ合つて、この教室の学習意欲が芽ぐむまでの過程として、又その事がそのまゝ教育であると思念する私の意志なのでもあります。

ロ 私が教壇に立つと、級長の合図でいねいに敬礼します。この敬礼は教師の私だけに向つて行ふものではなく、先生への、友達同志への、教室のいろいろなものへの、そして授業学習そのものへの、この愉快な一時間を迎へることの出来る凡てへの感謝の心のリズムの表現として行ひます。

（五分）

#### ハ 私の総評的文話

##### ○形式について

1. 記述上の約束
2. 氏名などの書き方

##### ○内容について

1. 取材の自由なことを称賛する。
  2. 粗雑で、しんみりしたところが少ない。つまり、愛情と内省を欠いてゐることを注意する。其他（十分）
- ニ 数人の子供に題目、取材、内容等を発表させ、みんなの

感想をいはせ、私も断片的に文話します。(五分)

ホ 数人を指名して、朗読発表させます。(誰に指名するかは豫め子供の作品をよみ、予定しておきます。)

一篇毎に内思鑑賞、作者の感想、私の文話又は批評。

へ 各自静かに黙読反省、感想を付記して、提出させます。

ト 学習態度の称賛。(十五分)

チ 起立して、ていねいに敬礼。(五分)

以上(四十分)

備考と経過(備考部分 略)

#### ○第一時 文話

1. 前任校の児童の成績や、教師の作品、雑誌「赤い鳥」の作品等に依って文話。

2. 子供は大いに感心して聞いてくれました。

#### ○第二時 課題

1. 子供の力がわかりませんから、それを知るために課題

「朝起きてから学校へ来るまで」を与へ、時間的に平面的に記述させました。

2. それによって子供たちは、いたづらで学習的には、ちつとも落着きがなくこまったものであるが、しかし、それだけ取材への取りくみが自由に活動的であることがわかりま

した。

#### ○第三時 自由作(文話)

1. 「学校へ来るまで」を文に即して具体的に概評しました。

2. 第一時の参考作品と、第二時の作品を比較して、生活そのものの、人格そのものが文章であることを話し、

3. 生活途上のできごとを精密に叙写することができるようにしむける暗示を与へ、次時への予告としました。

#### ○第四時 自由作(創作記述)

1. 「今日は一つ、みなさんがこの間中に自分で見つけておいたできごとを材料にして、綴ってもらひませう。」

「書けますか。見つけてありますか。」

2. 非常な意気込みで、大ていの子供が二枚程書いて出しました。

#### ○第五時 詩の指導(文話)

1. 生活の詩的感、観照を知らない子供は、(この年頃としてその指導の欠けてゐる子供は)あまりに殺風景で非芸術的です。リズムを知らないをどりのやうで調和がありませんので、読み方の「登校の朝」と関連させて詩の鑑賞と生活の鑑賞について文話をしました。

2. 子供は、気に入ったと見えて、課外の作品が相当多く集

まるやうになりました。

## ○第六時 詩の指導

1. 課外作品（詩）の処理、第四時自由作の清書。

2. 詩、綴方、共に私が子供の程度に應じて朱を入れてやりました。そして、それを清書させました。

自己批評、相互批評、などはすべて今後の仕事であります。

ここには、単に一時間の授業だけでなく、全七時間にわたるひとまとまりの指導の流れが簡単ではあるが示されている。福富の独自の指導法という面があるにしても、「赤い鳥」の優れた作品の鑑賞と教師の文話を中心にし、綴方や童謡、自由詩の創作を織り混ぜた指導が、三重吉や白秋の選評を基にした、「赤い鳥」綴方の一般的なやり方であったことが推測できそうである。そして、当時の「赤い鳥」綴方作品が、このような指導過程を経て生み出されてきたことを窺う、貴重なものと言うことができよう。

「赤い鳥」綴方の指導に当たる福富にとって子どもはすべてであり、絶対的な存在であった。

◇子供は私の生命の糧です。子供の育つ所に私の生活はある。

……私にとって子供程尊いものではありません。子供程私に光あらしめてくれるものではありません。子供こそは、私の如来様なのでござります。……

◇私が教育するのではない。私が教育されるのです。育てるのではない。育ってもらふのです。他力です。私は他力本願。子供に依る他、何もないのです。子供は私の信仰です。

◇純な子供の感情の世界に抱かれつゝ育って行く自分自身の魂を、静に大切に温かく見守る所に私達教師の生命の進展があると思ひます。

こうした考え方に立つて、子どもを取り巻く学校の状況を見ると純真な子どもの心や生活、伸びようとする芽を侵害するものが幾つも目についてくる。例えば、福富は言う。

やかましくいつて掃除させる場合が必ずしも教育だとはいへない。放任しておく場合の方がより以上の教育である場合がないといえない。窓硝子の掃拭だつて、澄明そのものが教育でもあるまいし、不潔不透明そのものが教育でないとうしていいよう。……「校舎が少しきたないが。」でいゝぢゃありませんか。私たちは気づかずに他事に熱中してゐることが多いのです。掃除よりも以上の生活をしてゐるかも知れませんが、意識的に子供の熱意を掃除以外へ引っ張り込んでゐるかも知れませんから。「当番ガラス拭け。」とやれば学校は整然として来ます。これでは、子供には創作なく生活なく所謂先生の生活場となつてしまひます。それこそ、校長さんにビク／＼です。



「やるな」と禁めれば先生の前でやらぬだけです。それこそ何よりわるいうそつきになってしまひます。根本を打ちこわします。子供のすべてを認定して、そこから出発したいのです。



私は、私の時間割を都合よく作つてゐた。綴方、図画、体操、手工、書方をなるべくつゞくやうに、そして、どちらへでも都合のつくやうにしてゐた。殊に最後の時間に綴方や図画をおいて時間の不足したときは課外へつゞけるのが一番便利だと始終感じてゐた。凡て、芸術的教科は、午後の方がしんみり落ちつきが出ていゝやうに思ふ、……つまり、子供の創作気分を出るだけ尊重する様にしてゐたのである。然し理解のない人にははせると、ある子供は綴方をやつてゐる。或る子供は、外へ行って写生をしてゐる。先生はパンツ一つで幅飛びの選手に小言をいつてゐるといふ風景は、真面目な態度だと見えぬらしい。餘程、しっかりした校長さんでないと非道い目にあはされるのが普通である。

特に後者で福富が言っているようなことが、例として挙げた綴方「ごむかん」から垣間見られる。「見たこと聞いたこと、あったことを、そのまゝ書く」ことをめざす「赤い鳥」綴方であるから、そこに書かれていることは、事実であらう。

さすがの三重吉も、選評の中で「學課の時間をぬけ出して、勝手に遊び廻ることだけは甚よくない話であり、それに、作中に出てゐる或にはひから推して、吉村君の級の人はしじゅうそんなことをしているらしい點も感心出来ません……」と、気にかけている。

前掲「岐阜縣教育」に発表した一文の中で、福富は「時には自然放任主義の教員の如くに誤解を受けて」と述べているが、大正自由主義教育の時代と言われた当時であっても、大勢は保守的な流れであり、その中であつて革新的とも言える「赤い鳥」綴方の指導だけでなく、教育実践全般にわたつて、しかも推察するところ、福富だけが、ひとり我が道を行くような状況は、自分の意のままの学校管理を専らに考える校長にとつては、誤解どころか、異端視、さらには排斥ということになつたのであらう。

福富が、転々と学校を異動させられた背景には、そういう事情があつたのであらう。更には、滑川道夫が『赤い鳥綴方の支持者は赤だ』といった根拠のない流説もおこなわれ（『日本作文綴方教育史』）たと書いているが、福富の場合も、そうしたいわけのない攻撃をうけたことが、『帽子をかくさせるな』の中の夫人の回想録の中に、書かれている。

岐阜県の「赤い鳥」綴方の名声を全国的に広めた本荘小・福富高市であつたが、この間及び本荘小を出てからの数年にわたつて、自

らも苦難の道を歩き、本荘小の「赤い鳥」綴方も、結局、福富ひとりの実践であったがために、

本庄校が当時破竹の勢で進出してゐたので、僕はわざわざ此學校を參觀したものさ。處が中心となつてゐる福富訓導が代つてゐるべきものがなかつたのにはガッカリしたな。此校は其後誌上から影をひそめてしまった。(木村文助・前掲書)

という結果に終わった。

しかし、先にも触れたように、行く先々の學校で「赤い鳥」綴方指導の成果を挙げ、「私の『赤い鳥』主義」を貫き通したところに本荘小での「赤い鳥」綴方の指導実践にも増して、福富の立派さがあるのではないだろうか。

福富はこの後、岐阜県師範學校の長良への移転に伴い、長良小が代用附屬小となった昭和九年、岐阜市白山小に転じた。昭和十二年十月の最後の「赤い鳥」(鈴木三重吉追悼号)には、当時の著名な人々にまじって追憶の一文を書き、そして昭和十三年一月、三重吉のあとを追うようにして、白山小現職のまま病没した。享年四十歳であった。

## 五

今渡尋常高等小学校児童の綴方が初めて、しかもいきなり(推奨)

(特選)の作品として「赤い鳥」に載ったのは、大正十二年五月号である。なおこの号では、《表3》で見えるように、掲載綴方七のうち実に四作品が岐阜県の児童のものであった。

### 氷乗り(推奨) (特賞)

岐阜縣可兒郡今渡小學校高二年

川合 克巳

「秀夫君、氷乗りに行かな」と言つて、勢よく呼びに走つた。秀夫君は裏の町長さんのかどで、守正君と遊んでゐたが、僕がいきなりかう言ふと、二人はこちらを見て「うんよし」と言ふなり走つてきた。やがて二人揃ひで池へ來ると、はや小さな子供は竹を杖にして、氷の上をおそがく歩いてゐたが、僕等の顔を見て、ニコツくとして水鼻をすゝつた。僕等も氷のくろの方で笹葉をしつかり握つてすべりはじめた。すると今までおそがく歩いてゐた正夫は何と思つたか、平氣でとつと歩き廻り出した。ふと日が照つてゐる方へ行つたからたまらん、薄い氷は見るくうちに破れて、正夫は池の中へ落ちてしまった。僕は冷汗を出して、「あんな小さい子だから背がたないだらう」と思つて、あつけに取られてその様子を見てゐると氷はみじくに破れて、水は正失の乳のへんを濡らしてゐた。これを見るなり、はつと安心して、「正失、まっところちらに手をつい

て出よ」と叫んだ。すると手をかけて出ようとしたが、氷はまた破れて、あやふく池の中に倒れようとした。僕はどうなるかと心配したが、間もなく又上らうとしたが、氷は破れて出ることが出来ず、手を掛け足を掛けもがくうちに、氷は疊一枚位の所破れてしまったので、正夫は泣くばかり、誰も助けに行く者はない。助けるどころか、皆の者は逃げてしまつて、僕と澄夫君と二人きりになつた。「おんしの靴は破れちよらんに、助けてやつてくろ」と澄夫君に言ふと、「うんよし、その竹を貸せ」と言ふなり、竹を引き取るやうにして、正失の方へおそろく近よつて「こいつにとまつて来い」と言つて、ニュツとつき出した。正夫はしつかりそいつを握つたので、澄夫君はずる／＼と引き上げた。これで僕も安心したやうなものゝ、次の不安が浮んで來た。それは正夫を池へ落して、着物を濡らかせた重い責任を、おんだやうな氣がしたからだ。初め、どての上へ逃げてゐた皆のものは、正夫の着物をしぼり出した。そばを通る人は「お母あが嬉しがらつせるは」と冗談半分を言つて通つて行つた。すると誰か、「おれん一生懸命しぼつてゐるに、あんなことをこいて行きやがる」と、しぼるのをやめて赤くなつた手を懷中へ入れた。それからみんながかりで家まで連れて行つた。その時の正夫の顔はこの世の人ではないかしらと思

はれる程まつ青であつた。

この作品についての三重吉の選評は次のようである。

最後の高等二年の川合君の「氷乗り」は、高等課の生徒の作にいつも見るやうな、小ましやくれた、態度や表現が一寸もなくどこまでも、純にうぶ／＼してゐるところが嬉しいです。正夫君が氷の中へおちこんだところから、引き上げられて、みんなを着物をしぼるまでのところは、一々あり／＼と目に見えます。上らうとしても、氷はめり／＼碎けるしどうなることかと、讀みながらひやく／＼しました。これでは、氷乗りも氣をつけないと危いですね。しまひの方で「おやく／＼、そんなにづぶぬれになつて、さぞお母さんが喜ぶだらう」といふ意味の悪口を言つて行くところも、その人やみんなの顔が目に見えるやうです。今渡小における最初の「赤い鳥」掲載綴方を書いた川合克巳は、本年（平成八年）米寿を迎える。そして今なお、「背伸びした大根寒し今朝の霜」「行儀良く軒に簾や吊柿」（平成七・一一・一五）など、俳句、狂俳、短歌による日記をつけ続ける。氏の回想談の概略は次のようである。

わたしが高等科のときの受持は、奥村靖雄先生だった。高等科一年と二年が一緒の教室で習った。

あの綴方は、たまたま靖雄先生が「おまえの書いたのおもし

ろかったで、出してみたがなあ」と言って、しばらくしてから「赤い鳥」の雑誌を持ってきて、「ほれみよ、ここに載っとるで」と言われ、わたしはその雑誌をもらった。自分の綴方が載って、うれしかったことを覚えている。靖雄先生も初めは「赤い鳥」に綴方を投稿するのを内緒にしておられたんやろうが、わたしの綴方が初めて載って、先生も嬉しかったのやろ、それから先生も面白くなって、綴方をたくさん出しなされたのやと思う。

綴方の時間、題は指定されず「なんでもええで書け」ということだった。あの綴り方は家で書いて持っていたように思っ作り話でなく、実際にあったことやで、先生が見ておもしろかったのやろ。「赤い鳥」にはかの学年の子の綴方が載ったのは、靖雄先生が話しかけて、ほかの先生も興味を持ってやられたのではないかな。

先生が読んだのを教室へ持ってみえたのかどうかよう分かんが、毎月、「赤い鳥」をクラスでとって、「好きな者は読め」と言われた。また、「こういういいおもしろいものがある」と言って「赤い鳥」の中の話を抜き読みしてくださった。そりゃ子どもは楽しいわなあ。

わたしは書いたりするのが好きやった。「やぶかげの畑でちょ

うちよが舞っている」という俳句を作ったら、靖雄先生やったか、靖雄先生と気の合った大沢先生やったか、「普通、ちょっとというと、花、というふうやが、これは、ちょっと思いつきがおもしろい」という批評を受けたことを覚えている。

唱歌の時間、先生はよく蓄音機を活用してレコードを聞かせてくれた。子どもの好くようなレコードがあったでな。楽しかった。そして唱歌の点数はみんな同じで、八点でなかったかな。やさしい先生で、わたしには「心」のあった先生やった。自由教育というか、授業は型にはまっていなかった。本当からいうと、自由過ぎた方かなあ。

責任感も強かったのか、終戦の時、加治田の学校の校長でおられて、自殺してしまわれた。

《表2》による今渡小の掲載数のうち、綴方一、自由詩三以外はすべて高等科の児童の作品であり、また、《表3》により、ほぼ継続した今渡小綴方の掲載が大正十四年前半で終わっていることは、奥村の可児郡春里小への転任の時期と重なっており、この今渡小・奥村の場合も、本荘小・福富の場合と同じく、

……これまで優秀な作を見せてゐる學校といったところで、特別な除外例のほかは、いづれも、その一校中がそろって、正當な教課をうけてゐるわけではないらしく、……たゞ、ほんと

に理解ある、或一人の教師の率ゐる級だけが、立派なものをかいてゐたといふ場合が多いらしかつた。従つて學校によつては、さういふ、選ばれたる一人の教師が轉任すれば、……綴方らしい綴方は生れないことになるわけである。(昭二・一)

と、鈴木三重吉を嘆かせたような結末になつて終わっている。

奥村靖雄は大正四年、岐阜師範學校を卒業、今渡小へ赴任して、以後十年間、同校に勤務した。俳句、短歌をよくし、殊に俳句は、『五風十雨』(奥村 治著、『奥村靖雄子息』)によれば、飾範學校時代からの累計一万余句。その多くは、岐阜の俳人塩谷鶴平の選に入り、奥村野守夫の名で岐阜日々新聞に載つたということである。奥村靖雄も、文學青年の面を持っていたことが分かる。

奥村靖雄はまた、折りにふれて感想、教育論、実践記録などを書いてゐるが、几帳面な人だらしく、野紙に書いたり、謄写版刷りにしたりしたそれらを、俳句や短歌などの原稿と共に自家製本し、『野守夫集』四冊として遺している。『野守夫集 一』は師範學校時代のものであるが、『野守夫集』二、三、四には、今渡小在任最後の大正十二、十三年に書かれたものがまとめられている。各冊とも二百五十ページ前後、どれも目次が付してある。

その中の、綴方指導にかかわる内容としては、次のようなものが挙げられる。

- ・鑑賞による綴方指導法
- ・岐阜縣教育會雜誌記者に呈す
- ・童謡は一時的流行品か
- ・「見る」といふ事に就いて
- ・どうしたら名文が書けるか
- ・何のために綴方をかき
- ・童謡なんか作るか
- ・綴方教授案

この中から、奥村が実際に行つた綴方の授業が推測できるもの一、二を見てみよう。

「鑑賞による綴方指導法」は、謄写版刷りであるが、冒頭の欄外に、「以下五枚ハ大正十二年五月十九日ヨリ二十三日ニ至ル五日間東京高師ニ於テ全国訓導綴方研究会ノ開カレタルトキ出席發表シタル草稿也」との書き込みがある。この時の發表の要項はつぎのようである。

座席番號 六七

岐阜縣可兒郡今渡小學校訓導 奥村靖雄

鑑賞による綴方指導法

一、緒言

イ、鑑賞の効果

ロ、鑑賞の趨勢

ハ、鑑賞の材料

二、指導法

イ、美的読方により靜聽せしむ

ロ、批評感想をのべしむ（別刷鑑賞と感想参照）

ハ、名句妙所に線をひかしむ（別刷文章の鑑賞参照）

ニ、童謡等の鑑賞のさせ方（別刷童謡の鑑賞参照）

ホ、鑑賞を重んじたる板上批正

三、成績品を尊重すべきこと

イ、評点（推奨 佳作 普通）

ロ、評語

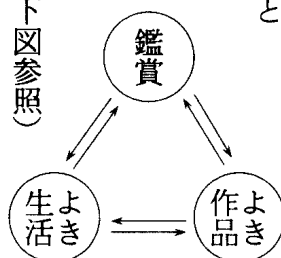
ハ、深切と同情とを以て読んでやること

ニ、童謡展覧会（実物参照）

ホ、雑誌への投書

ヘ、多数児童に紹介する

四、綴方は鑑賞に出發し鑑賞に終ること（下図参照）



この要項の後に、「別刷」資料が付されている。いずれも、歌、

文章、童謡を提示した時のそれぞれについて、児童の反応をまとめ

たものであるが、提示された作品をみると、例えば「童謡の鑑賞」

では「次の八篇の童謡を示し一人につき優秀篇二篇づゝを選ば」せ

たとある童謡八篇は、「赤い鳥」掲載の児童作品である。

滑川道夫によれば、この頃は『赤い鳥』派の綴方に対して、一般に高師系の綴方教育界主流派は、白眼視していた（『日本作文綴方教育史』）というから、その主流派の大もと東京高師を会場とし

た研究会での奥村の発表は、「赤い鳥」派と見られるのに十分な内容であったと言えるであろう。

もう一つの「綴方教授案」は、奥村が、恐らく公開授業のために作成したと思われる謄写版刷りのものである。

綴方教授案 大正十三年九月二十四日

可児郡今渡小学校訓導 奥村靖雄

一、学年 高等科第一、二学年

一、目的 鑑賞の指導

一、方法

前時間ニスマシテアル分

1. 自由詩四篇ノ刷物配布

2. 黙読セシメテ質疑ニ答フ

3. 次ノ三項ヲ記入セシメテ提出セシム

A. 最も感鳴シタ詩一ツノ頭ニ◎ヲツケテ

B. 氣ニ入ツタ行ノ右側ニ——ヲ施シテ

C. 餘白ニ批評 感想ヲ記入シテ

以上

本時ノ予定

1. (準備) 前回ニ使用シタル刷物ノ詩四篇ヲ板書シテオク

2. 前回提出セシメタルA、B、Cニツキ結果ノ報告

3. 「白秋氏批評」刷物ノ配布

コレヲ読マシメテ質問ニ応ズ

4. 「鴟の塔」刷物配布

黙読、質疑応答、感想批評ノ発表……児童

5. 自由詩ト童謡トニツキテ

物ノ觀方が大切

6. 北原白秋氏ニツキテ

以上

資料に使われた自由詩四篇はいずれも、「赤い鳥」掲載の児童作品の中の（推奨）となった作品であり、「白秋氏批評」はその四篇についての白秋の「選評」である。参考としてある「鴟の塔」も「赤い鳥」に載った白秋の詩。なお、同じ紙面に、参考作品として

麦こなし（推奨）

高二 吉田 稔

隣で

麦こなし

麦からが

吹いてくる

夕立雲

を載せているが、これも「赤い鳥」（大二三・一〇）に載ったばかりの、学級の児童のものである。この自由詩について白秋が「吉田

君の『麦こなし』は見方が鋭い。隣の出もいいが夕立雲でピタッと結んだのは重みがあつていい。」と、選評の冒頭で述べたことは、研究授業に当たろうとしていた奥村にとって、この上ない自信と励ましを与えたことであろう。

授業に使う資料としての作品を、「赤い鳥」の詩やその選評から採り、三重吉や白秋が「赤い鳥」の選評欄の中で勧めている指導法に従って、奥村の綴方の授業が行われていることは明らかである。福富高市と同じく、奥村靖雄も、「赤い鳥」の熱心な信奉者であつたと見ることができよう。

なお、教案の余白に、奥村自身の俳句三句が載せてある。

□ 秋蚕 まつ白な目棚が竈の上まで 靖雄

□ 瀧戻りは下駄も猿又もきれいになつて //

□ すだれの目をもれくる風もひやくくなり //

この自由律の句を、奥村は恐らく授業のときに使って、児童たちに鑑賞から創作への意欲をかきたてたのではないかと思われる。

「赤い鳥」に共鳴して実践を続けた奥村が、どのような児童観をもっていたのか、大正十三年に書かれた「児童に導かれて」（『野守夫集三』）の一文によって見てみよう。この稿は、児童の綴方を通して、児童をどうみるか、また、それに対する親や教師の在り方について見解を述べたものである。

□純眞性、それはひとりこの児のみが持つてゐるのではない。

すべての児童が生まれおちる時すでにひとしく授け与へられてゐる所の性質である。純眞性言ひかへればそれは神性である。佛性である。私達教師は、人の親は、学校に於ても家庭に於ても、この莊嚴なる純眞性を子供の生命の裏に成長させる様にとこそ苦心し努力するのが第一の任務ではあるまいか。これが教育の第一義諦である。博識にとか金持ちにとか高位高官とかへの教育は私に於てはとらざる所である。私達は目的と手段方便とをとりちがへてはならない。

□……誤りたる目的観に立つ教育に依つてことごとくの児童は最も尊い純眞性、神性の芽えをちよんぎられてしまつて大人になるのである。かくして出来上つた社<sup>シャ</sup>界が、どうして天国の如く極樂の如く圓く美しく行く筈があらう。……

□……そこに私も小学校教育者に天から与へられた重任は存する。それに私たちは先ず気づかねばならぬ。醒めなければならぬ。いふまでもない、それは教師自らが醒め、理想の生活、憧憬の生活、これを無上の樂しみとし、卒先児童を率い、たゞ私達が指導した児童が大人になつた暁には自然に理想郷が打建てられるやう、せかずあせらず、目的を遠くに置いて、効果を急ぐことなく教育の仕事に樂しみたい。これが現在私が辿つてゐ

る道なのである。

□おー、純眞その物である児童達よ、神そのものである児童達よ。お前たち子供を害ふものは私達大人である。ゆるして呉れよ。私たち大人はお前たちから導かれ教へられ救はれて生きてゐます。濁りに濁つたこの世に一味の清風を与へてくれるもの、それはお前達子供だ。もしこの世からお前らを取り去つてしまつたらばどんなにか無趣味、殺風景恰度沙漠の夕暮れをでも彷徨するやうな世となりはてゝしまふだらう。……

この文を書いたのと同じ頃、奥村が詠んだ短歌にも、子どもを思う心情が溢れている。

- ・ま夜中にふともおもへる教へ児の今し結べる夢や安きと
- ・名もあらぬ児らの物せる文の中にも尊く光れるがあり
- ・何事も己れに出づる教へ児の罪のかずくいかでかぞへん
- ・あどけなき児童にまじりてチョークとりて

われ果てぬれば思ふことなし

子どもの存在を無上のものとし、純粹、一途に理想を追い求める奥村には、教育の現場及びそれを取り巻く社会の大人たち、特に教師、行政関係者等の愚劣、醜惡、保身の言動や心が、子どもとの対比において許せない。それを憎み、追求の思いに驅られる。

- ・かなしきは正しき道としりつゝも正しき道にすゝみえぬこと



と、自らを責めながら、「校長論」では校長人事を論じ、「私をみかく心」では、操行査定の問題について、査定する側の教師の品性を論ずる。「岐阜縣教育會雜誌記者に呈す」では、童謡教育に取り組む若い教師の意欲に水をさすような、誌面での評言を批判し、「童謡は一時的流行品か」では、新しい時代の教育に不勉強な、指導的立場にある者の軽率な発言を批判する。「可愛さ餘つて憎さが百倍」では、奉職する学校の校舎増築、教員定数の増加、学校設備の充実の多年の願いの実現に消極的な町長への激しい憤りと自己の弱さを述べる。

本荘小・福富高市の場合と全く同じように、旧態依然たる大勢の中にあっての児童中心の革新的な教育観、「赤い鳥」綴方を中心とした実践、そして特に、児童の純真性、神性に対応できない権威、権力への厳しい批判等、やはり奥村靖雄の場合も、異端視される恐れは十分にあつた。

奥村靖雄先生回顧談の中で、川合克巳（前掲）はこれにかかわることとして、「赤や、と言ふ言葉を聞いたこともあるが、あの当時は、思想がどうこうというのでなく、ちょっと変わったことをすると、赤というようなふうにしたんやないかと思う。」とも言っている。福富の場合と共通する状況があつたことが推測される。

この後、奥村は同郡春里小へ転任し、次いで昭和三年、同郡中小

へ転ずる。この中小在任の三年間は、「赤い鳥」の休刊（昭四・三）から復刊（昭六・一）へ、という動きのあつた期間である。

この中小で、奥村は、「赤い鳥」復刊へ向けて、積極的に動いたようである。復刊「赤い鳥」第一号巻末には全国の「赤い鳥」会員名簿が載せてあるが、岐阜県のところには、本荘小學校殿（三五冊）長良小學校殿（三〇冊）、川口半平殿（三〇冊）などにまじって奥村靖雄殿（九冊）とある。また、同年五月号の追加会員名簿欄には、「可児郡中村部会一〇名」とあって、その筆頭に奥村靖雄の名が載っている。第一号の九冊と、第五号の会員一〇名とから想像されるのは、奥村が復刊「赤い鳥」をこれと思う人に配り、「赤い鳥」会員加入を勧誘したのであらう、ということである。

昭和五年八月の、鈴木三重吉から福富高市、牧田吉雄宛書簡には、「赤い鳥」復刊へ向けての努力へのお礼の言葉があるが、その封筒裏に「……可児郡奥村さんによろしくお礼をおつたへ下さい。」と書いている（『帽子をかくさせるな』）。この文言からは、三重吉は、「赤い鳥」復刊、あるいは岐阜での講演会についての奥村の尽力を知っていたことが推察される。

また、復刊「赤い鳥」には、中小児童作品が

・三月号 綴方一（尋五）

・五月号 綴方一（高二） 《自由詩一（卒業生）》

が掲載されている。

ここで注目されるのは、掲載された児童の学年が分かれていることである。中小で奥村がどの学年を担当したのか未調査であるが、いずれにせよここでは、自分ひとりだけの実践ではなく、周囲の人を巻き込んだ「赤い鳥」綴方の実践を行ったことが窺える。このあたりは、福富が、転任先の学校でも、自分の学級だけでの実践であったのと違っている。

この作品のうち、六月号に載った尋四児童の綴方は、鈴木三重吉が「赤い鳥」会員の拡大のために全国を回った時、「赤い鳥」綴方作品例として講演の中で使った一つになった。（『日本作文綴方教育史』昭和七年七月、三重吉が再び岐阜で講演した時にも、この中小児童の綴方を例にして話をしている。（『教育新聞』）

おひなさま（佳作）

岐阜縣可兒郡中尋高小学校尋四

相羽登久子

今日學校からかへつてみると、おひなさまの箱がすゑてあつた。それで私が、きくちゃんに「はい、おひなさまをかざりなれるか。」と言つたら、きくちゃんが「ねえちゃんが學校にゐるときにかざりないたぞ。」と、言つた。

それで私が、かばんをおきにきてみると、かばんのかけるところがなかった。それで私が、神さまのまへへきて、つと何の氣なしこちらへむいたら赤いつぎが見えた。まへへきてみたらおひなさまがかざつてあつた。

ひなだんは、五だんにつんである。一ばん上は、ごてんが二つあつて、二つの内、向つて左のごてんは屋根なしです。柱があつて、まんなかにふさが、さがつてゐます。ふさの色は赤です。そのおくには金のびやうぶがあり、そのまへには大りんさまと小りんさまがおいでる。大りんさまはせんすを持つてかたなを持つて、かんむりをかぶつて、おいでる。小りんさまは頭の上にきら／＼のかんざしみたいなものをのせて、すわつてみえる。

右のごてんには、上がりだんがない。左のごてんは、屋根もあり、ひさしもある。くろに、ろうかがある。ろうかのまへに上がりだんがある。上がりだんのまへには、三人の女の人がおいでる。一ばん左の女の方は、神さまにお米やいろ／＼のものをすゑるやうなものの黒いのをもつて立つていらつしやる。まんなかにゐる女の方は、すわつてどびんのふたのないやうなものをもつてゐる。一ばん右の女の方は、けつちなものをもつておいでる。ごてんのよこには花がすゑてある。それで一だん。

こんどは二だん目。二だん目の一ばん左にはさくらの木があつてそのまへには、うら島太郎が、つりざをを、片手に持つてゐるところです。そのまへには、玉手箱がすゑである。二ばん目は、おひなさまがかんざしをあたまの上にのせて、せんすを持つて長い着物で長いたもとで、をどりをしてみえるところです。その横には男の人が、きんぐの着物を着て何やしらん、をかしたもを持つておいでる。三ばん目は、松の木が一本あつて、そのまへには、女の人が頭の上に、まへがちよつと、へこんだ、丸いやつをかぶつて、きぬの着物を着てさの兩はしにはバケツのやうなものをつけたのを手で持つて立つておいでる。その横の男の人がちよんまげにかみをしばつて、やりと刀を持つてゐる。一ばん左には、せいの高い人がをかしたもをかぶつて、刀をさして弓とやりとを持つて立つてゐるのです。それは私のおひなさまです。その人のまへには小さな人がすわつて「あしきですてゝ、はらひたまへ、天理教のみこと」と、やつてゐるのです。そして今、兩手を顔のまへにやつてゐるところです。それで一だんです。

つぎは三だん目。三だん目の一ばん右のは、かきねがあつてその中に竹やぶがあつて、まへに、雀とおぢいさんとがゐるのです。おぢいさんがきんぐの着物を着て、きんぐの羽織を

着て、つゞらをしよつて、紫のづきんをかぶつてゐるのです。それで雀が、きぬの着物のながいたもとのを着ておぢいさんを見送つてゐるところです。二ばん目は男の人がながい、たもとの着物を着てつゞみを持つてゐる。その横には、さくらの花が咲いているのです。三ばん目は、女の人が竹の兩はしに、バケツみたいなものをつけてそれを兩手で持つてゐるところ。一番左にゐる人は男の人でながいぼうしをかぶつて、ずぶを持つてをどつてゐるのです。それで一だんです。

四だん目は、三人ばやしです。その兩くろには、人形が一本づゝ花を持つてゐます。それから、ねこと、まあ一つは、男の子がまりを持つてなげやうとするところです。その外は人形ばかりです。

この綴方について、鈴木三重吉は次のように評している。

……相羽さんの「おひなさま」は取材的に珍しい、おもしろい作です。ひなだんにいろいろのものがならんでゐるのを、こんなにこくめいにかき立てた人はちよつとありますまい。内裏さまを「大りんさま」となまり、その「大」に對して、一方を「小りんさま」といふのはこの地方のよびなしでせうか。相羽さんが、その大小りんさまを叙して、かんむりをかぶつておいでる、きらくしたかんざしみたいなのをのせておいでると

敬語でかいてゐる氣持が純朴でかはいらしいです。三人の官女のことも、女の人がおいでると、やはり敬語でかいてゐます。

つぎにおもしろいのは、三寶の事を「神さまにお米やいろいろのものをするやうなもの（そなへるのにつかふあの道具のやうなもの）」と言つたり、銚子のことを「どびんのふたのないやうなもの」と言ひ、二段目のところでは、「汐くみ」の人形が、「さをの兩はしにバケツのやうなものを手でもつて立つておいでる」と言つたりしてゐる、子どもらしい感受も、「それで一だん。こんどは二だん目。」と、話しすゝむその口調もおもしろいです。全篇的に快活な、あかるい、子どもくした感興がみなぎつてゐるところが、かはいく、純滑稽味があふれてゐます。

奥村靖雄は、昭和六年四月、新任校長として恵那郡笠置第二小学校（現・恵那市毛呂窪小）へ赴任した。六年間の勤務を終えたが、郷里可児郡へ戻ることはできず、同郡串原小学校へ転任した。「希望に反し、恵那南端三河境へ。ほんとうは可児郡へ戻りたかったらしい。左遷か？ 父としては悩みも相当大きかったようだった。」と『五風十雨』にあるが、奥村靖雄はこの時の心境を短歌に託している。

転任に際して（昭和十二年弥生月）

・西の空われ恋ひながらあつま路の旅にそむかふかへりみにつつ  
・笠置嶺のそひゆる限りこの里の人こころはもいかでわすれむ  
・泣けかしと弥陀のたまひし涙なればそのつくるまで

泣かんとぞおもふ

・都をは八重の潮路に眺めつつ袖しほりにし人をしそおもふ  
串原小二か年で、奥村はようやく可児郡に戻った。錦津小である。十余年前、稲葉郡を追われた福富高市が、最初の一年をここで勤務したと縁めぐが、奥村はこの学校の校長として、村長との考え方の相違に苦しんだようである。

・村長と対立となり学年末の事務

・眠られぬままに句をかきつくるなり木枯夜深か

今渡小時代も町長との考え方の相違を書き綴っているが、校長ともなれば、村長とじかに話し合わねばならず、子ども・教育一途の奥村の考え方と政治は、衝突せずには済まなかったと推測される。

二年で加茂郡下米田小へ。太平洋戦争となつて、軍国主義教育を一層推し進める立場に立たされた奥村には、これまで教育の考え方の中核に置いてきた「子ども」に、お国のために命を捨てよと語ることがどれほどの苦悩をもたらしたか、また、時代の大勢への懷疑、苦悩、躊躇が、戦時下の校長として不適格、との見方を周囲へ与えたであろうことは想像に難くない。

・君がため命捨てよと教ふるが教育ぞとはあやまりなるや

昭和十七年二月の日記に書き留められた一首である。（『五風十雨』）

再び二年で同郡加治田小へ転任し、二年余で日本の敗戦を迎えた。命を奪い、人と人が殺し合う戦争。その時代の流れの中で、一校の長としての奥村靖雄には、心ならずも行ってきたそれまでの教育に対する痛恨、悔悟の念が残らなかったのではないだろうか。昭和二十年十月一日早朝、自刃してこの世を去った。五十四歳であった。

福富高市の四十歳での病死と、奥村靖雄の敗戦による自刃と。

岐阜県の「赤い鳥」綴方実践に大きな足跡を残し、「赤い鳥」主義の教育に、純粹、真面目、ひたむきに取り組んだ二人の死は、共に深い哀感を漂わせている。

## 五

高山女子小児童の綴方が「赤い鳥」誌上に載ったのは大正十四年初頭である。

お人形賣り（推奨）

岐阜縣大野郡高山女子小學校尋五年

櫻井 つぎ

昨日、屋臺藏の前で、近所のきよちゃん、健ちゃん、菓子屋

のきみちゃんと貸本屋のきみちゃんと五人であそんだ。きみちゃん「お人形賣りせんかな」と言ひ出したら、皆手をたゝいて賛成した。そして私が買ふ人で、きよちゃんが賣る人になった。私が横町の角に来てゐると、きよちゃんが、きみちゃん達に「おまいたち、前掛をかぶつてをれよ」と言った。菓子屋のきみちゃんが「おりたちや、お人形さんかいな」と言つて、前掛を顔にかぶつた。健ちゃんが「まんだとつてだちかんのかな」と言つたら、きよちゃんは「まんだ人が買つてくれらはらんうちは、前掛をかぶつてをることちや」と言つた。きよちゃんは私の方を見て「ほゝい。買ひにおいでよ」と言つたので、私は「もうえかな」と言つて買ひに行つた。健ちゃん達は前掛を頭にかぶつて垣にもたれてゐた。きよちゃんは芥箱に腰かけてゐた。私はきよちゃんに「ごめん、お人形さんをやつとくれんさい」と言ふと「へい〜どうぞ、あんばよう見て買つてつとくれんさい」と言つた。私は一番右のはしにゐた健ちゃんの腹を指先で打つと、チョン〜と言つたので「ちよつと、これやいたんどるな」と言つて、前掛をとると、舌べらを出してゐた。「これやだちかん」と言つて、前掛をかぶせて、こんどは菓子屋のきみちゃんの前掛をとつたら、大きい目をして前をにらんでゐた。前掛をかぶせて腹をたゝいたら、ギヤア〜と言つた。

私は「これもよいけど聲がだちかん」と言つて、又貸本屋のきみちやんの腹をたゝいた。きみちやんはやさしい聲でホギヤア／＼と言つた。私は「これやえい。こいつ、やつとくれんさい」と言ふと、きよちやんは「へい、七圓にまけときますわいな」と言つた。私はふところから、鼻紙を出して「十圓ぢやが釣りくれんさい」と言つたら、きよちやんは「今こまかいもありませんで、この次でよござんすさ」といつたので「さうですよ」といつて、きみちやんをつれて横町の所まで来て「ここをりないよ」と言つて又買ひに出かけた。三人とも買つてしまふと、今度はきよちやんが買ひに来る。電氣のつくまでお人形賣りして遊んだ。

三重吉のこの綴方に対する選評は次のようである。

その次の五年生の櫻井さんの「お人形賣り」も無邪気な可愛作です。これも對話が方言そのまゝで寫してあるので、實感がよく出てゐます。「おり（おれ）だちや、お人形さんかいな」などといふ言葉は、浄瑠璃の中のセリフのやうで抒情詩的ですね。東京では、たまにお雛ごつこといふことをします。大勢が雛になつて並んでゐるのを「雛一ちよおくれ」と言つて買ひに行くのですが、このお人形ごつこのやうに、腹を押へて泣かせたりすることはありませんから面白くありません。ともかくこ

の作は實寫的に活き躍つてゐて可愛く愉快です。「だちかん」といふ方言は前號にも出てゐましたとほり、「らちがあかん」が詰つたもので「だめだ」といふ意味です。

本荘小、今渡小の場合、それぞれ福富高市、奥村峰雄という「赤い鳥」綴方に熱心なひとりの教師がいて、自分の担任する学級で、「赤い鳥」に影響された教育観、綴方観に基づく実践を行い、指導成果をあげていた。それに比べて、高山女子小の場合は、特にひとりの教師、というのではなかった。杉下友之助校長の下、学校全体として、大正期のいわゆる自由教育と言われた新しい教育が行われており、「赤い鳥」綴方もその新しい教育の一環に位置づいていた。そして、学校文集「銀のすゞ」を中心にして、学校ぐるみで綴方指導に取り組んだところにこの学校の特色がある。

高山町で小学校が正式に男女二校に分割され、女子児童だけによる高山女子尋常高等小学校が発足したのは、明治四十二年四月である。以後、校名を高山南尋常高等小学校と改称し、男女共学とした昭和六年四月までの二十二年間、女子児童のみの小学校教育が行われた。杉下友之助が同校の第二代校長となつたのは、奇しくも「赤い鳥」が創刊された大正七年のことであった。

杉下は、明治三十五年岐阜師範学校卒。同三十九年高山尋常高等小学校女子部に着任以来退職するまでの二十五年間を高山女子小に

勤務し、その中の十二年間を同校校長として手腕をふるった。

職員組織が充実し、「飛騨の附属」とも言われるほどであったこの頃の高山女子小が、どんな状況であったか、例えば同校の「学校沿革史」の大正十二年の記述の中には、

一 齊的劃一的注入的教授ノ弊ヲ脱シ児童ノ個性ニ即シタル自律學習ノ氣分ヲ作興スル爲メ今年一學年間研究時期トシテ各級トモ種々ノ研究ヲナシタリ特ニ實地授業の研究會ノ如キモ一時休止シ居タルガ再ビ復興シテ研究ニ便セリ

とあり、今日にも通ずるような、新しい教育の氣風がみなぎっていたことが分かる。また、校名改称後の南小で作られた「開校五十周年記念誌」や「南風之薫（南校だより）開校七十周年記念特集」の中には、高山女子小の教員であった人たちの回顧談が載っているが、そこから、当時の女子小の雰囲気を知ることができる。

……何といつても教育に関する新刊図書を読む意欲が旺んで、他校より一步先に読むことを誇りとしていた。教育雑誌がくるとむさぼり読んだ。広告欄に新刊書が出ているとだれよりも先に注文した。学校でも、職員に一冊宛の新刊書を渡され、毎月その概要の発表会が開かれた。……（田中 茂）

夜の宿直室には、四五人集らないことはなかった。そして教育論、学級経営等々に花を咲かせたものである。「君、哲学の

ない人生なんて淋しいよ」等と平塚先生にベルグソンの哲学をしゃべりからかされ……正月、夜昼なく学校に集まって遊んで居たら杉下校長が新刊十五六冊抱えて、にこにこして入って来られた。本には名前の書かれた細長い紙がはさんである。

「あゝこれは平塚さんに」「あゝ、これは桂川さんに」と、二冊、三冊と渡される。私も二冊受け取った。「ざっと読んで、皆に要点だけ話してやつて頂きたいんじや」とにこにこして言い渡された。俄然冬休みも吹飛んで「おやじにやられた。ようし、こうなりや、一つうんと読んで要点を印刷し、発表会をやるう」と言うことになり、若い者だけに頑張った。（藤井英男）

……女子校へ赴任して、「これは大変な学校へきたものだ」とたまげたことがある。それは放課後の職員室の静寂さであった。先生方が子供の成績や雑記帳を直したり、丸をつけたたりされる「サッ!!サッ!!」と言う赤いペン先の音だけであった。それが毎日なのである。……子どもたちがどれだけ受け止めたか、教育の進め方の基本を、子どもたちの現状把握におく、このペンの音は私のその後の教育指針となった。（同前）

高山女子小の教師たちの、新しい教育にかける意気込みと、真摯な努力が感じられる内容である。

女子小の教員ではなかったが、大野郡内の別の小学校で教員をし

ていた畑中裕作が、大正十三年、高山女子小で開かれた研究会に参加した時のことを、『岐阜県教育の回顧と展望』の中で次のように書いている。

女子校の田中、内木、野村の三氏の公開授業も観たが、どれも子どもに小黒板を利用させたり、参考書を調べさせたり、盛んに自発活動を促す、型破りのものであった。……女子校はその年の第三学期から、四十五分授業を四十分短縮することによって、毎日一時限を生み出し、新教育の「独自学習」の授業に充てた。その施設として、小黒板をたくさん作ったり、学級文庫を充実したり、……女子校の新教育は、こうして飛騨教育界の先頭に立った。児童劇、自由画、学校文集「ぎんのすず」など、児童文化の方面にも、先駆者的な役割りをつとめて業績があった……

また、早船ちよ（前掲）は、高山女子小で受けた教育について、『ふるさと飛騨』の「わたしの母校」の項で、次のように回顧している。

尋常一年生から六年生までの六年間、藤井嘉蔵先生の受持ちで、持ちあがりだった。

藤井先生は、「ひとを、だいにする」、「じぶんを、だいにする」、「ひとと、じぶんの場をだいにする」、「個性尊重、

才能をのぼす」自由主義教育を指向されていた。幼い尋常一年生に対しても、その人格を尊重して、対等な言葉づかいで、ものをいわれた。

「勉強は、あんただちが自発的に、やり方を見つけてすすめていくもんじゃ。先生は、その助言者であり、補導者にすぎんです」

藤井先生は、たいていの時間は、窓ぎわの日和へ椅子をもちだして、刻みタバコをキセルでふかしながら、子どもの活動を見ておられた。五分刈り頭のつめえり服。子どもの目には、えらい年奇りにうつったが、三十五、六歳だったのか？ おなじ学年の、若い平塚先生や桂川先生と、大正期デモクラシーさいごのころの新教育に打ちこんでござった。

封建性のつよい地域、女子校という時代ばなれた体制のなかで、もっとも先進的な新教育が試行錯誤的に行われていた：教科書のなかみを、より深く、ひろく、学級文庫や学校図書館の参考書や辞典でしらべてくる。それを、研究発表用の小黒板（一平方メートル大のが、十四、五枚、常備してある）にかきしるす。

授業時間には、教壇は解放されているので、研究発表をもとにして説明し、討論しあえばいいのだった。わいわい、大声



で、意見をのべ、反駁し、討論するのは、たわいもない遊びに似ておった。

二時間つづきの綴方の時間、午後いっぱい、時間の枠をはずしての、キックボール、野外スケッチなど。宿題は、めったになかったから、放課後は、じつによく遊んだ。

早船はまた、『教育 青いノート』の中で、尋常科六か年間の担任であった藤井嘉蔵について、次のように書いている。

「語り」とか、「話術」とかいう表現方法を、藤井先生もまた、持っておられた。先生は、母と質がちがうけれど、実演童話家的な「語部」でした。

国語、綴方、修身、歴史、地理の授業が、先生の話をきいているだけで、いつのまにか一時間がおわっていることがありました。綴方の時間には、森鷗外や菊池寛の作品をよんでくれることがあり、萩原朔太郎、千家元麿の詩の鑑賞の時間になることもあった。生徒が、変わるがわる詩や短編を朗読し、生徒じしんの綴方も作者が朗読する、ということも多かったのです。

このような雰囲気の中、高山女子小では、大正十年四月、「児童ノ文章觀ヲ高メ文章能力ヲ練ル目的ヲ以テ児童新聞『野の花』第一輯ヲ創刊」(『学校沿革史』)した。大正十年という時期に、最初は新聞の形をとったにせよ、学校としての文集を発刊したということ

は、岐阜県全体から見て画期的なことであつたと言えよう。

児童新聞「野の花」は未見であるが、高山女子小学校作成による「児童文集発行の趣意並取扱」(高山・南小文書)によれば「四頁四つ切大の新聞紙の体裁」であつた。そしてこれを綴方向上の一助として尋常三年生以上の児童に配布したのであるが、「豫期の通り教育上の効果も大きく、児童にも甚だ感興を呼び頗る歓迎せられたので、より多くの児童作品を掲載し、取扱の上にも便利な体裁に」ということで、「第三輯から現在の四六版に改版して、題号も児童の命名した床しい『銀のすゞ』と改称」され、尋常三年以上(のち、尋常二年以上)の児童に配布されたのである。

高山女子小の児童文集は、校名を改称した高山南尋常高等小学校(現・南小学校)に保存されている。一、二輯(『野の花』、三、七、八、十一輯(『銀のすゞ』)を欠いているが、休刊となった昭和十五年三月までに、三十八号が発刊されている。欠いている号については、同校「学校沿革史」によって調べてみると、杉下校長在任期間中は、大正十年度、大正十三年度のみ年間二輯発行、というのを除き毎学期発刊されていることが分かる。なお、高山南尋常高等小学校と改称された昭和六年度からは、最初の年度のみ年間二号、以後は毎年一号ずつの発刊となっている。

前掲文書にもあるように、「銀のすゞ」は四六版の活版印刷、

八十ページ前後の冊子である。号によって多少の違いはあるが、大  
体、各学年十編ぐらいの割合で（高等科作品がやや少ない）綴方、  
童謡（自由詩）などが載せてある。

ミカンツリ 尋一 岡田有年

ユフベアンサマトネエサマトワタクシガ、ミカンツリヨヤリマ  
シタ。ワタクシハートウヤケレドカキヨ一ツナンダ、クレラハ  
ラナンダ。アンサマハ二トウデニツデシタ。ネエサマハ三トウ  
デシタ。ワタクシトネエサマトデ、「アンサマスツコイ。」トイ  
ヒマシタ。

ユキ 尋一 中島清子

ヤア ヤア ユキガフツタゾ。  
バンバデ ダルマヲ コシラヘルデ  
ウレシイナ。

いずれも、第四輯（大一二・一）に載った一年生の綴方、童謡の  
作品の中の一つである。

当時、尋常一年児童の綴方については、文字や語句を中心にした  
指導で、自分の生活をひとまとまりの文章として書き表すことはま  
だ無理、という考え方が大勢を占めていたようである。「赤い鳥」  
にも、この頃までにはほとんど掲載されていない。そういう時期に、  
尋一の綴方や童謡を積極的に載せていくことは、一年生の児童とい

えども生活とその表現を大切にしていこうとする、高山女子小の見  
識を物語っていると言えよう。

「銀のすゞ」の作成が全校的なかわりの中で行われたことは、  
例えば、編集についてみると、「第三輯以前は国語科研究部員の手  
に依って編まれたが、以後は特に各学年受持教師中から、一ケ年の  
任期で一名づゝの委員が囑託」されていた。

また、全校態勢による「銀のすゞ」作成は、製本の作業にも見ら  
れる。前掲文書には、「製本に関する一切の労作は、職員児童の協  
同作業に属して、印刷所の手を掛けないことは、他にその比を見な  
い處で、しかも近時は一千三百部内外の製本を僅々二時間餘にて完  
了するに至っている。この労作が、出版実費の軽減となり又児童の  
文集愛好心を高め、同時に尊い協同勤労の体験となつてゐる」と述  
べられている。主として高学年児童の協力によるものであるが、  
ここにも、新しい教育に取り組む高山女子小の行き方が現れている  
ように思われる。

この、文書番号一ノ二と表紙に印の押された「児童文集發行の趣  
意並取扱」は、原稿用紙十四枚にペンで手書きにされたものである。  
いつ、だれが書いたものか明記はしてないが、文中に「……本校文  
集は二十七の齡を重ねるまで……」という表現があり、また、「学  
校沿革史」の筆跡と同じようであること、さらに内容の書きぶりがな

どから、二十七号が発刊された昭和五年末から二十八号の発刊される昭和六年三月までの間に、この年度限りで退職を決意した杉下友之助校長が、大正十年来進めてきた学校文集「銀のすゞ」について、思いを込めてまとめたものではないかと想像される。

本文の内容は、

#### 第一 児童文集発行の趣意

#### 第二 文集取扱の概要

#### 第三 課題文掲載について

#### 第四 文集発行の過程

から成っている。大正末期から昭和初頭にかけての岐阜県における綴方指導の貴重な記録として、第一、第二の部分について、全文を掲げておく。

#### 第一 児童文集発行の趣意

時代の發達文化の進運に伴つて、小學校諸教科の研究は愈其の深味を加へ、各種の主義方針が種々提唱せられて來た。

国語科の主要分科たる綴方科も種々なる主義主張が叫ばれ、吾人實際者の頭腦を左右して來て居る。が然し其の研究たるや他教科に比して、本科の性質上地味で華やかに人目を引かぬ爲か、一般に氣勢があがらない様に思はれる。實際教授に當る者その教授に對する努力の割合に、期待する効果の少いことを啣つを止め、研究の爲の研究とせず、本科の要旨をよく体得し、以て此の郷土この児童を對象として或る程度まで自信ある研究

をなし、本科愛好者たるべき資格を有するやう、努力を積み重ねばならぬ。

惟ふに綴方教育實際の上に少からず前代教授の傳統が惰性的に残つてゐて、その餘弊が時折擡頭して子供らしい眞面目な生活、赤裸々に表現することが不充分である様に感ずる。自由題に於て天真爛漫な児童の生活が、教師の示す範文の一定文體、或は着想の型に嵌めることを、良いことに考へて模倣これ事とする風があつたり、又同じ課題文にせよ十人十色で個性味を發揮すべき筈なのに、千遍一律に流れ概念的な、生氣も新味もない文を作らせて、成績上れりと思惟したり、又は感傷的な技巧の優れた文を賞美したりすること等は其の一例である。

自由教育の思潮が世に行はれた結果か、課題文を綴らしむることを時代錯誤と考へ、系統案を排斥して、放漫な無指導に終る自由作に、ながれやうとする傾向を排し、教授法の改善及び弊害馴致の豫防を講じ、描写が愈如実適確なるやう、児童の生活認識力を一層啓培し、以てのんびりとした子供らしさがよく現れて居る文章を、綴らせることが最も緊要である。それにはどうしても、學校全体なり、學級全体なりの児童の、綴方欲求の心を刺戟し、大に奮起させる機会を與へやうといふ意見の一致を見たのである。從來學級に於て謄寫版の文集が隨分作製せ

られては居たが、更に全校児童の優秀文を一冊に集めて配布したならば、児童の綴方学習上に、將又教師の指導上に、多大な利便があらうといふ具体案に基いて、大正十年三月此の文集の創刊を見るに至つたのである。

茲に便宜上次の二項を設けて、文集發行の目的を一層瞭然たらしめたい。

#### (一) 児童の方面より観て

1. 募集に際し興味を以て応募し當選を非常に名譽と考へる。故に日常生活と綴方とが密接な關係となり、文題並に素材の蒐集に努力する。又製本配給までの努力労作は、児童に發行までの経過を知らしめるから、文集を愛好するに至る。
2. 配布を受くるや、讀み能ふ範圍の學年の文は、再三読破して他児童の、思想感情に接する。従つて自己の及ばぬ所を發見したり、或は暗示となり自己の生活を擴する。
3. 綴方科に對する趣味が一層濃厚となり、創作試作の欲求が起り、自ら記述能力が多種多様に發達するから、相關的によりき生活をなすことになり、無味乾燥な筋書をなす弊風を脱して、如實な力あり味ある文を作り得る様になる。
4. 讀書力が養成出来る。自由に自力に應じて文集を味讀するから、従つて眞面目な課外讀物の理解が出来、娛樂的讀

物に耽溺する傾向を制する（本校は坊間販賣の小説雜誌類の購讀は禁じ、學習參考書といへども一々教師の許可を受くべき規定である）ことが出来る。

#### (二) 教師の方面より観て

1. 児童が自己又は自己の環境に起す事象に對しての注意力、觀察力、世相に對する批判力、道德的判断力等の發達段階、若しくは傾向を知ることが出来る。
2. 應募文を審査する委員は優秀文を審査する上に多大な參考資料を得る、即ち直接児童の作品に觸れて、相互に意見の交換をなすことが出来、綴方研究問題にはよい解決を與へる。
3. 綴方の教授に従ふ者にとつて、児童が学年相應に、如何なる事物現象を文材とし易きか、表現上の手法は如何なる範圍かを知り、伸展させる標準が大体了解出来る。
4. 文話の資料として又系統案の材料として活用することが、本文集の大切な使途である。

以上述べ來つた趣意に依つて發行せられるが、要は児童の生活を伸展せしむる、綴方教授の一方便として利行せられるのである。

#### 第二 文集取扱の概要

本文集は毎學期の終りに發行（年三回）し、尋常二年以上の児童全部に準教科書として供給して居る。

綴方擔任教師は、發行の趣旨を体して、有効に活用すべき具體的方法を種々工夫考慮して居る。教授者各自の意見で、實際取扱上の細部に至つては多少の相違はあるが、大要に至つて相似たものがある。今其の大要を以下に記して見るならば、

1. 正課時間に鑑賞材料とし又文話資料として、一齊に使用出来るから、原文或は参考文を謄写又は小黒板等に一々全部記述するの必要なく至極便利である。

文集からは等資材を採ることは、作者の生活状態が比較的他地方児童の作品に表はれたるものよりも、了解し易いのは合理的であるといへる。

豫告に依つて児童は家庭又は学校に於て、教師の指定したる綴方或は童謡なりを充分読破し、正課時間中になつて、自己の批評意見を口頭又は筆頭によつて發表する、かくして綴方に対する鑑賞の眼を養ふ。

特に綴方の基礎となるは気分と態度である、之を正しく養ふ様に努めれば、作者の努力に対し敬意を拂ひ、其の意志を尊重するといふ美風を起させる。

此の時代の名譽心に富む児童は、教師の讃辭を呈した優秀

文を模倣し延いては、他人の内容表現を全部剽窃して、入選の栄を獲得せやうといふ、不徳義を敢てするが如き児童も往々にして生ずることがある。かゝる児童に対しての豫防線ともなる様に、綴方は眞の自己生活でなくてはならぬ、人格の發露なる意味を充分理解せしむる等、有意義な取扱が出来る。

蓋文集は發行前には將励となり、發行後には此の鑑賞に使用せらるゝことが、最も大切な任務である。

2. 學年を定めてその學年の綴方中にて、最も優良なるものを投票せしめ、高学年に於ては其の上批評感想を記さしめる。

これはなるべく多く、なるべく深く読ましめんとする一つの方便とするものである。

3. 読本と連絡を図り得る作品は、隨時補充文或は参考文として取扱ふ。例へば日記文手紙文の如きは、読方にて取扱ふ前後に、文集中の日記文手紙文を引用して、各方面から比較考察せしめるも面白い有効な一方法である。

「第三 課題文掲載について」の項では、「課題指導が、児童の眼識を刺激して偏した綴方に陥るを防ぎ、生活の深化を計る一方法として、課題作と自由作を平行すべき主要な指導法」と規定し、昭和五年度の「銀のすゞ」から、毎号一課題による綴方を掲載するようにした趣旨を述べている。

「第四 文集發行の過程」では、前掲の「銀のすゞ」発刊の経緯や発行までの手順等を述べた後、この学校文集が、職員の文章研究指導の实地研究、発表会等各方面の綴方熱を高めたこと、綴方教授の大切な資料となったことを述べ、最後に、「銀のすゞ」が「過去に於ける綴方教授に一新生面を開いた功績を遺したものだと思ふ」という言葉でまとめている。

このように見てくると、この時期の高山女子小においては、ただ「赤い鳥」綴方だけに取り組んだというのではなく、大正の自由主義教育の流れの中であって、子どもたちの個性、自由、そして学習の意欲を大切にしながら、自主・自立・自発の教育を目ざし、学校図書館、児童劇等幅広い指導を行っていく、その中に綴方指導も位置づけられ、奨励されていたことがわかる。言ってみれば、この学校における「赤い鳥」綴方は、福富高市や奥村靖雄の場合と違って、強固で、幅広い基盤をもっていたということができようであろう。

従って、例えば早船ちよの著作には、綴方を指導した担任の藤井嘉蔵の名があり、同年の担任、平塚 清、桂川好廣の名も書かれているが、大正期末「赤い鳥」に綴方が載った子どもたちは、早船の一学年上の児童であり、この指導にあたった担任は、学校沿革史で見ると、野村常太郎、岩島隆玄、丸山輝吉の中のどれか、と考えられる。三重吉の言う「選ばれた一人の教師」による指導ではなく、

集団態勢の中のたまたま一人の教師の指導したものが、「赤い鳥」に掲載された、と言えそうである。

また、綴る力の広がりが高まりという点から考えてみても、当時の高山女子校の全校児童は、『岐阜県五十年史』によれば千百余名である。その中から毎学期、選ばれた七十編前後の作品が「銀のすゞ」に載せられるのである。福富や奥村が、ひたすら「赤い鳥」綴方に情熱を注ぎ、自分の学級の傑出した児童作品を次々と、数多く「赤い鳥」に乗せたとは違い、前掲文書の中に「全校児童の綴方の氣勢は益々高潮し、綴方のよき態度・気分をそっくり立て……」とあるように、傑出した個人よりも、学校としての全体的な質の高まりを願った綴方指導ではなかったかと考えられるのである。

高山女子小の、「銀のすゞ」を中心とした全校的な綴方への取り組みは、確かに、先覚者とも言うべき校長杉下友之助の力に負うところが大きいと言える。しかし、これを、ちょうど福富高市や奥村靖雄が、ひとりで「赤い鳥」綴方に取り組んだのと同じように、高山女子小だけが、一校だけで綴方指導に取り組んだと見ていいのであろうか。

この時期の高山女子小は、大野郡の各校である。大野郡には、高山女子小に先行して、「赤い鳥」に綴方作品が掲載された福寄小、大八小がある。また、郡は違いが、南に隣接する益田郡・萩原小が

同じ時期、「赤い鳥」に自由詩作品を多く載せている。そして復刊後の「赤い鳥」には今井鑑三（萩原小訓導）が、童話を幾つか載せている。

大正期末の「赤い鳥」に掲載された岐阜県作品を学校別に見たとき（表3）参照）、地域的なかたまりを示しているのは、この大野・益田地区である。前回論考に、「岐阜縣教育會雜誌」（大4）に掲載された益田郡教育會提出の意見書を引用したが、そこに見られる進歩的な提言とも合わせ考えることで、高山女子小の実践が一層明らかになるのではないかと考えている。

#### 注

- (1) 明治四二年一月三日創刊。毎月一回十日発行。編輯・小木曾修二（旭晃）。発行所・教育新聞発行所（岐阜市七軒町）。創刊号の「發刊の辭」は、少年時代の教育の大切さから筆を起こし、少年を国民として恥ずかしくない人物に育成するために、趣味教育、家庭教育の改善、地方教育界擁護の三大綱領のもとに本紙を発刊する旨を述べている。昭和一五年五月、第四二六号をもって廃刊となった。

- (2) 「赤い鳥」には「中之條」となっているが、当時においても武儀郡には中之條小学校はなく、現・中之保小学校長廣瀬卓夫氏に

調査をお願いし、同校卒業者名簿で「澤田傳治郎」名を確認していただいた。また、岐阜県校長会館・澤田土岐男氏から、澤田傳治郎（故人）の親戚、友人の話をいただいた。

- (3) 児童文学者、作家。大正三年、吉城郡古川町に生まれ、生後すぐ大野郡高山町に移る。旧姓住田ちよ。「キューポラのある街」（日本児童文学者協会賞・厚生大臣賞受賞）五部作。「峠」「湖」「街」三部作と以後の作を含めた「ちさ・女の歴史」全八部。「ポンのヒッチハイク」（サンケイ児童出版文化賞受賞）「いさごむしのよっこちゃん」等、著書多数。

- (4) 児童文学者。明治四五年、揖斐郡藤橋村に生まれる。岐阜師範学校附属小学校、長良小学校訓導、県教育委員会指導主事、岐阜大学教育学部附属小学校主事、岐阜教育大学教授等を歴任。「もぐりの公紋さ」「千本松原」（野間児童文芸奨励作品賞受賞）「花ぶさとうげ」（小学館文学賞受賞）「化石山」「どろんこの餅」「いとろへの道」「山にいのちかがやくとき」「子どもが耳をすますとき」「お母さんの知恵」等、児童文学・教育の面で多数の著作がある。

- (5) 明治三〇年、揖斐郡徳山村に生まれる。岐阜師範学校附属小学校訓導、小島小学校長、県視学、長良国民学校長等を歴任。元岐阜県教育長。「生活共感の綴方教育」「生活開発の綴方教育」「作

文教育変遷史」、「山のコボたち」「なみだをふけ門太」、「母は子の心に灯をともし」「濃飛戦国武将伝」「郡上凌霜隊」「物語濃飛史」等、教育・児童文学・史伝など幅広い分野の著作がある。

- (6) 俳人。明治一〇年、稲葉郡鏡島村に生まれる。最初是有季定型の俳句であったが、河東碧梧桐を識り、その新傾向運動に共鳴、散文的表現、自由律的表現をとるようになった。碧派の俳人として活躍。個人誌「土」（一号～三〇〇号）、「俳藪」（昭二・創刊）

など、門人の指導に力を注ぐ。素封家で、滝井孝作がその庇護を受けたことがある。（松井利彦編『俳句辞典近代』による）

- (7) 明治三六年、大野郡灘村に生まれる。高山女子小校長杉下友之助の実弟。高山西小学校、長良小学校訓導、県教育委員会指導主事、加納小学校長等を歴任。元高山市教育長。同じ飛騨出身の垣内松三の知遇を得、形象理論による読方教育に取り組んだ。

#### 参考文献

- ・「赤い鳥」 大正7年7月～昭和4年3月（前期）
- ・「赤い鳥」 昭和6年1月～昭和11年8月（後期） 赤い鳥社
- ・「赤い鳥」 鈴木三重吉追悼号 昭和11年10月
- ・「教育新聞」 明治42年11月～昭和15年5月 教育新聞発行所
- ・「帽子をかくさせるな」 福富 易編 あかり書房 一九二一年一月

- ・「野守夫集二、三、四」 奥村靖雄遺稿 奥村 治氏蔵
- ・「五風十雨」 奥村 治著 私家版 昭和61年8月
- ・「高山 南小学校文書」

#### ・学校沿革史

- ・児童文集発行の趣意並取扱 高山女子尋常高等小學校

- ・「銀のすゑ」第四輯（大正12年1月）～第二八輯（昭和6年3月） 高山女子尋常高等小學校

- ・「開校五十周年記念誌」 高山南小学校 昭和29年9月

- ・「南風之薫」（『南校だより』開校七十周年記念特集）

高山南小学校 昭和49年9月

- ・「岐阜県教育の回顧と展望」 岐阜大学教育学部教育百年

実行委員会編 昭和48年1月

- ・「日本新教育百年史 5」 小原国芳編 玉川大学出版部

昭和44年6月

- ・「ふるさと飛騨」 早船ちよ著 新宿書房 一九七〇年三月

- ・「教育 青いノート」 早船ちよ著 草土文化 一九七五年二月

- ・「峠」 早船ちよ著 理論社 一九六六年

- ・「岐阜県教育」 岐阜県教育會編 大正10年、12年、昭和7年

- ・「岐阜県郷土資料研究協議会会報」第30号

岐阜県郷土資料研究協議会 昭和56年10月



・「綴方生活」(三一九) 昭和6年8月 文園社

・「作文教育変遷史」 川口半平著 岐阜県国語教育研究会

昭和33年10月

・「花ぐるみ」 川口半平著 母と子ども社 昭和49年8月

・「岐阜県教育発達史」 戸部芳文著 大衆書房 一九九二年〇月

・「日本作文綴方教育史 2」 滑川道夫著 国土社

昭和53年11月

・「『赤い鳥』の時代」 桑原三郎著 慶応通信 昭和50年10月

・「岐阜県教育五十年史」 岐阜県教育會編纂 大正12年12月

本稿における今渡小・奥村靖雄の実践に関しては、奥村真人氏、奥村 治氏に、また高山女子小の実践に関しては、高山市南小学校長藤澤喜義氏に、資料提供等格別の御配意をいただいた。